
妹はふろうふし

道化童子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹はふろっふし

【Nコード】

N3213BA

【作者名】

道化童子

【あらすじ】

高校二年生の風楼拓海は、ある日家に帰ると父にいきなり妹を紹介された。

妹の名前は風楼伏。

義理でも片親違いでもなく、父と母の娘で、戸籍上もきちんと登録されている妹だと説明される。

突きつけられた現状を受け入れざるを得ないが、いきなり年頃になって紹介された妹はただの他人の女の子であり、そんな子といきなり同じ家に住むことになり緊張していた。

だが、妹の方は妹として振る舞い、しかも彼のベッドに潜り込んで来たりもする無邪気な女の子だった。

P i x i v 小説にも投稿中

家に帰ったら妹がいた。(前書き)

この小説は年齢制限はありませんが、エロとまではいきませんがえつちな表現がふんだんに盛り込まれていますので、ご注意ください。

家に帰ったら妹がいた。

幕間 研究者が降り立つ街

ここは地方の一都市。

いや、都市と呼べるほどの規模でもないだろう。

だが、この辺りでは中核となる街であるため人の通りも多く、電車も数多く通っている。

その中でも最も大きく、市の中心街に位置する駅。

そこは様々な人が行き交い、混み合っている。

駅の改札は電車が来るたび多くの人々を吐き出している。

そんな改札が、人ごみの合間に彼らを吐き出した。

「なんか、普通の街ね、ここ。田舎でもなければ、都会でもない。一番つまらない街よね」

立ち止り、腰に手を付きながら、開口一番悪態をつくのは、ゴシックロリータの服がよく似合う小柄な少女。

生意気そうな瞳がつまらなそうに駅周辺を眺め、そのたびにツインテールがゆらゆら揺れる。

キャスターつき旅行バッグを持って歩いている姿は、大都市の特定の場所へ行けばよく見られる光景だが、この辺りでは珍しく、行き交う人々も、彼女を振り返る。

中学の半ばくらいの容姿の、ゴスロリスタイルで反抗期丸出しの態度は、あるいは大人から見れば微笑ましくも見えるかもしれない。だが、実際にはその周囲の人間からは、ただ面倒に感じるころう。

「自分から来ておいて何言ってるんですか、こんな何も無い街に。僕としてはさっさと帰って研究でもして欲しいものですけど」

ため息混じりに少女の言葉に答えるのは、彼女の隣を歩く男性。いや、まだ少年と言ってもいい年齢だろう。

長めの髪が似合う美形だが、あまり表情を見せず、飄々としたところがあり、少女の我儘も聞き流して平然としていられるタイプである。

ある意味少女の天敵でもあり、周囲から見ればお似合いでもあると言える。

細身の身体に細身の黒いスーツがよく似合う。

理知的な表情には、大人の良識と子供の悪戯っぱさが中途半端に同居していた。

「うるさいわね、樋田！ これも研究だって言ってるでしょうが！」
「所長の研究は研究室で十分出来るはずです。お得意のアンチエイジングの観点から」

「だから、うるさい！ あんなのいくらやって精度が良くなっても限界があるって言ってるでしょうが！」

所長と呼ばれる少女と、部下と思われる樋田と呼ばれる少年。

端から見れば恋人の喧嘩、しかも少女の我儘を少年が流しているようにしか思えないが、彼らはれっきとした社会人である。

しかも、高度な研究者なのだ。

少女の名は水上結衣。

十歳でアメリカの大学に入学し、十四歳で博士^{ドクター}の称号を得た天才少女だ。

その後日本に戻り、化粧品会社で画期的なアンチエイジング化粧品を開発し、大ヒットさせる。

それにより会社から億単位の報奨金を得て独立し、不老不死研究所を立ち上げた。

その研究所は主に、アンチエイジングの薬品や化粧品を開発し、企業に売る事で利益を得ているが、彼女が本当に研究がしたかったのは不老不死なのだ。

財力を得た彼女は、それを不老不死の研究につき込み、足りなくなればアンチエイジングで稼ぐ、というやり方でここまでやってきた。

見た目中学生に見える彼女は、こう見えて今年で十七歳である。
アンチエイジングや不老不死の研究の一定の成果で、多少年齢を
重ねずにいられたのだ。

だが、それはただ単に経年を遅らせる事しか出来ない。

彼女の求める本当の不老不死は、永遠の命なのだ。

「あんたも経営の事なんて考えなくてもいいから、研究の手伝いく
らいしなさいよ！ 何のためにあんた雇ってると思ってるのよ！」

「所長の尻拭いですか？」

「違うわっ！」

「ですが、僕はアンチエイジング以外、大抵所長の尻拭いしかやつ
てませんよ？」

樋田は相変わらずの無表情で、上司であるはずの結衣に平然と言
い返す。

「うるさい！」

「はいはい、やれやれ。よっ、と」

樋田は重そうに荷物を持ち上げる。

彼の名は樋田信人。

彼女と同じ大学をこの歳で卒業している、同じく天才でもある。

十六歳にして修士^{マスター}、という彼女に比べれば多少見劣りする経歴だ
が、天才である事には変わりはない。

彼は修士^{マスター}を卒業し、博士^{ドクター}への進級がほぼ決まっていた去年に、ち
ょうどその頃独立した結衣が大学へと乗り込んできて、うちに来い、
と直接スカウトしたのだ。

結衣は自分の後輩に日本人で自分と同じ分野の研究をしている天
才がいる、ということススカウトし、樋田の方は既に大学では結衣
のことは伝説になっていたため、その伝説の人ところで働けると
思い、博士^{ドクター}への進級をやめ、研究所へと来たのだ。

二人とも研究所立ち上げ当時十六歳で、今は十七歳。

その歳で結衣と樋田の研究は大いに成功し、研究所は巨万の利益
を得た。

だが、その富は、結衣の一言により、不老不死などという途方もない研究へと費やされる事になった。

更に言えば、結衣の天才研究者とも、十七歳とも思えない容姿と態度。

最初は結衣を尊敬していた樋田も、徐々にそんな意識も削がれて行き、こんな態度を取るようになったのだ。

「で、何でもここに来たんですか？ 一応理由くらい聞いておきましようか」

「だから何度も言ってるでしょうが！ この町に不老不死伝説があるからよ！」

「所長、観光は自費でやってください」

「だーからー！ー！」

今にも爆発しそうな結衣。

慣れているので気も使わない樋田。

「ここに！ 不老不死の！ ヒントが！ あるかも知れないって！ 言ってるでしょうが！」

「所長、駅前で変な事叫ばないでください」

「うわーん！」

ついには泣き出す結衣。

一見中学生に見えるゴスロリの泣き顔は微笑ましくもある。

樋田はこうしていつも溜飲を下げるのだ。

「分かりました、そろそろ聞いてあげましょう。さあ、言ってみてください」

「うん、あのね……」

泣いて子供のようになった結衣がおずおずと話し始める。

「あ、長くなりそうなら食事しながらにしましょう。何かおごってください。イタリアンがいいです」

「きけー！ー！」

結衣の怒鳴り声は街へと消えていった。

「でね、この町には、人知れない不老不死伝説があるのよ」

ミートソースを口の周りにつけながら、結衣が言う。

「そんなものは全国にいくらでもあって、これまでも回って、全部眉唾だったじゃないですか」

ペペロンチーノを上品に食べる樋田が答える。

「そう、ここまで回ってきた不老不死伝説は大抵嘘や、情報ネットワークが発達していない時代の噂だったわね」

「ま、不老不死なんてそんなもんですよ。峠の茶屋に親父がいる。旅人がそこで茶を飲んで、三十年後にまた行くと同じように親父がいる。そのときに一緒に連れて行った子供が成長し、更に三十年後にまた行ったら、それでも同じ親父がいる。ああ、あの茶屋の親父は不老不死だ、なんていう」

「そうね、それは代替わりしてることに気がつかない人間の勘違いに過ぎないわ。後は三百年生きた高僧、なんてのも、ただ単に死んだ事を教えられてない周囲の村の人たちが何百年も高僧の存在を言い伝えて来たっただけで」

「で、どこに行ってもそれを観光に利用してるだけ。本当に不老不死があるなら、今も本人が生きているはずで、それがいないのに不老不死の里もないもんです」

樋田がやれやれ、と首を振る。

「でもね、ここは見ても分かる通り、普通の町よ。観光にも利用していないし、不老不死の里ってことも誰も知らない。なんだか、逆に怪しくない？ 本当に不老不死の人がいて、それを隠しているんじゃないかしら？」

「僕は所長を研究所に隠しておきたいですけどね」

「またあんたは！ 何でそう非協力的なのよ！」

食べ終わった結衣は、フォークを樋田に向けて怒る。

「アンチエイジングに関する研究なら、いくらでも協力しますよ」

樋田はナプキンで結衣の口の周りを拭ってやる。

「僕は不老不死なんてものの研究に、人生を無駄に使いたくないの

です。老病死が待ち受ける人間として、僕はアンチエイジングを研究していたのです」

「帰ったらやるわよ！ここにしばらく滞在して、また帰ったらしばらくそっちの研究するから！」

「分かりましたよ。じゃ、まず何をすればいいんでしょうかね？」

「とりあえずは、市の歴史が分かる施設や市役所に行って調査しましょう」

「はいはい、分かりました」

樋田は面倒くさそうな表情で食後のコーヒーを飲む。

「っ！？」

エスプレッソを頼んだはずなのだが、甘ったるいミルクティーが来ていて、味の違和感で驚く。

「ブアー！」

目の前にはミルクティーと思ってエスプレッソを飲んだ結衣の泣き顔があった。

「いや、そっちはさすがに色で分かるでしょう」

呆れながらも、樋田はナプキンを手にとった。

妹がふろっふし

親父の一言に、俺はしばらく何の反応もできなかった。

無理もない、いきなり衝撃的なことを言われれば大抵はこうなるんじゃないかと思う。

俺は自分の家の居間の前に、鞆すらまだ持ったまま立っていた。帰ってきて、親父に呼ばれた。

ああ、ここまでは何の不思議もない。

昼間になんで親父がいるのかと言えば、ニートだからだが、そんなことは今どうでもいい。

そこに入ってみると、親父と母さんと、後、見たこともない女の子が、こつちを見て笑っていた。

女の子は幼さも多分に残した表情をしているが、俺と大して歳は違わないだろう。

肩のあたりで切りそろえられた髪は、この子を人形のように綺麗に見せていた。

大きめの目がにこり、とこちらに笑いかける。

あ、可愛い。

そう思った瞬間だった。

「この子はお前の妹だ」

親父の言った一言に、俺は固まってしまったのだ。

真っ白になり、再起動して立ち上がるまで、およそ一分くらいの時間がかかった。

まず、何から確認しようか。

俺は風楼拓海、風楼家の子供で、一人っ子だ。

近所の公立高校に通う二年生で、成績は、まあ普通だ。

俺には二トの親父と専業主婦の母さんしか家族はおらず、三人でああ、喧嘩をしないわけでもないが仲良く暮らしている。

もちろんこれまで妹なんかいたことはないし、これからもあることはないだろう。

そう思っていた俺の知識に、思いがけない情報が降りかかってきた。

「えっと……」

俺はようやく、口を開いた。

「どっちの浮気？」

俺は二人を交互に指さしながら尋ねた。

「何言ってるんだ、お父さんとお母さんが浮気なんてするわけないだろ？　ずっと家にいるのに」

「そうよ、近所でも冬眠中の熊のような夫婦って有名なんだから」

「それ、褒め言葉じゃないから。ていうか、そろそろ働けよ。俺が

生まれて以来働いてないだろ……って、今はそれはどうでもいい。
あ、じゃあ養子か何かか？」

浮気して出来た子が、もう一人の親が死んで訪ねてきたってわけでもないなら、養子しかないんだろうな。

「違う。父さんと母さんが十六年前に愛し合って、十五年前に生まれた子だ」

親父が真剣な顔で言う。

親父は嘘、大げさ、紛らわしい事が大好きだが、この真剣な表情は本物だろう。

「……詳しく話してくれ」

「うむ……お前が生まれてすぐのある日、母さんがどこからか、ナース服を手に入れてきてな、それを着た母さんを見ていたら、私もムラムラとして」

「プレイの内容なんてどうでもいい！ この子が妹って言うんなら、今までどこにいて、何でここにいなかったんだよ！ あと、母さんも頬赤らめるな！」

息子にリアルな性を話すことはもう珍しくもなんともないのだが、まじめに話している時に言われるとイライラする。

「ふむ、やっぱり話さなければならぬか……」

親父が腕を組んで真剣な顔をする。

「この子は生まれつき身体が弱くてな。フランスの医療機関ですつと治療をしていたんだ。最近になってやっと治療法が見つかり、完治したので帰国したんだ。いつ死ぬか分からなかったから、お前に余計な精神的負担をかけたくなかったので、黙っていた。すまなかったな」

親父は暗記していたかのように、一気に言葉を紡ぐ。
怪しい。

そのいいわけは怪しすぎる。

「なあ、あんた」

俺は妹と称する女の子に聞いてみることにする。

「なあに、お兄ちゃん？」

につこり笑って少し首を傾げる表情がとても可愛くて、俺の中で「この子はもしかすると本当に妹かもしれない」という歯止めがなくなれば、この瞬間に恋に落ちていたかもしれない。

「あ、えつと……ちよつと、フランス語を喋ってくれないか？」

俺は目をそらしながらも、そんなことを言った。

「いいよ。イカノテジュボーン」

その子は、流暢な、おそらくフランス語で何かを言った。

「ナガジュバーン」

ん？

ナガジュバーン……長襦袢？

いやいや、たまたま日本語っぽく聞こえるフランス語だろう。

その前の方は日本語には聞こえ……。

イカの手十本？

「ポンジユース？」

「ダウト！ 心の太陽ダウト！ フランスと愛媛に謝れ！」

何のことはない、日本語をフランス語っぽく発音してただけだ。

一瞬でもだまされた自分が恥ずかしい。

「ばれちゃった」

てへ、って感じで可愛く微笑む女の子。

「どうしてそんな嘘をついた！」

俺は親父の胸ぐらをつかんだ。

「待って、お兄ちゃん！」

女の子が、俺の腕をつかんで止める。

「ちよつと後にしてくれ、あと、お兄ちゃんとか呼ぶな！」

「だってお兄ちゃんだもん！」

強く俺の腕をつかむその子に、強い口調でそう言われると、俺も少しは手を緩めてしまう。

その隙に親父は逃げる。

俺は追うことはなかった。

だから、女の子も俺の腕を離す。

「お父さんの言ってた事はほとんどデタラメだけど、私の身体が弱くって、学校に行けずに治療してたのは本当なんだよ」

「……いや、元気そうじゃん……」

俺の腕をつかんだ力は、少なくとも病人のそれじゃなかった。

「だから！ 元気になったの！」

強い主張、いや、若干怒り気味の口調で半ば怒鳴る女の子。

そう言われると、嘘か本当かはともかく、これ以上の反論もできない。

ただ幼くて可愛い女の子に見えたが、実際はちゃんと芯があつて、強く物も言える子のようにだ。

俺の目を見て離さない。

信じて欲しいとその目が訴えている。

「いや、まあ、信用してないってわけじゃないんだけどさ……」

ここまでする以上、本当のことか、とんでもない悪女の素質を持った子かのどちらかだが、そもそも俺の疑問には一切答えてはいないので、俺のわだかまりは解けることはない。

「私は、フランスなんかには行つてないよ？ ずっと、この家で治療に専念してたんだよ」

訴えるような目でまっすぐ見つめられてそう言う。

こんな可愛い女の子に、結構近い距離からそう言われると信じるしかないのだが、それにしてもまずは俺のわだかまりを解いてからだ。

「いや、信じたいのは山々だけどさ、俺もこの家に生まれた時から住んでるんだよ。でも、一度も会ったことがないだろ？」

この子を信じたいと思つても、その事実を変えようがない。

ここにいた、とこの子が主張するが、いくらなんでも十数年間、俺と一度も会わなかったなんてことはないだろう。

「それは、お兄ちゃんからずっと隠れて生活してたから仕方がないよ。昼は出てきたりしてたんだけど」

「いや、それにしても、この家に隠れるところなんてどこにも……」
言いかけて俺は一つの事実を思い出した。

「もしかして、あかずの間か……？」

俺はおそろおそろ聞いてみた。

「へえ、お兄ちゃんはおかずの間って呼んでるんだ。うん、そうだよ。お兄ちゃんの部屋の隣だよ？」

その子は、あっけらかんとそう言って笑った。

あかすの間っていうのは、俺の部屋の隣にある部屋のことだ。

小さいころに、そこにおばけが出ると言われて入らなくなった部屋で、しかもそこから物音も聞こえてきたので、子供の頃は本当に怖かった。

だが、その気配も物音も、いつに間にか慣れ、今では特に気にすることはなくなったのだが、確かに今でも気配はしていた。

だが、特に疑問に思うことはなく、今までそこに入ったことはなかった。

まさかその向こうでこの子がこれまでずっと住んでいて、今も住んでるって言うのか？

いやいや、さすがにそれはないだろう。

いくらなんでもそこまで隠す意味がない。

「私は特殊な病気だから、あまり人と会えなかったんだ」

俺の表情に疑惑を見た彼女が、そんなことを言う。

「でも、私はずっとお兄ちゃんの気配や物音を感じていたんだよ！
会えなかったけど、ずっと」

女の子は、大切な何かを抱きしめるように胸に手を当てる。

それが何かは分からなかったけど、俺は確かにこの子の気配を感じていた。

それと同じように、この子はそれを感じてたんだろう。

「お兄ちゃんは、いつも何かのトレーニングをしてるよね？」

「？ してないと思うけど？」

無邪気な表情でそう言われるが、俺には心当たりがなかった。

「でも、二十二時ごろ、毎日ものすごい勢いで何かをこすってるよね？ 息も荒くなるくらいだから、てっきり何かのトレーニングかと……」

「ストップ！ わかった！ 信じよう！ お前はこの家にいた！」
完全無防備だった俺は、この子に毎日それを聞かせてたのかと思うと、なんていうか、申し訳なくなってきた。

確かにそこまで知っているなら、あそこに住んでいたってのも事実だろう。

「だが、それが兄妹っていう証拠にはならないぞ。他人だっ一緒に住むこともあるだろう」

赤の他人の女の子にあれを聞かせてたかと思うと、是が非でも妹だと思い込んでいた方がいいんだろうけど、そこはやっぱり確認しておく方がいいだろう。

「お前はそういうと思った。だから、こんなものを用意した」

親父がテーブルの上に乗せたのは、一枚の書類だ。

よくは分からないが、戸籍に関する書類らしい。

その家族の欄にはこう書かれていた。

世帯主 風楼勝徳ふうろうしょうとく

妻 祥陽しょうよう

長男 拓海

長女 伏

「……ふせ？」

「ふしって読むんだよ、お兄ちゃん」

また、妙な名前だな、と思ったが、目の前に本人がいるので黙っていた。

まあ、この親父が付けた名前だと考えるとこんなもんか。
ともかく、戸籍を見せられると信じるしかない。

これが親父の偽装ってこともないわけじゃないが、どっちにしろ、

この子がこれからもこの家に住むのは変わらない事実なんだろう。それなら妹にしておいた方がいい。

こんな可愛い子が妹じゃないと思うと、どうにかなってしまう。

「これからはよろしくね、お兄ちゃん？」

腕を後ろに組み、少し首を傾げながら俺を見上げてにつこり笑う伏。

これだけ可愛い妹がいるのは、幸せでしかない。そう思うことにした。

「ああ、分かったよ、えっと、伏
「うんっ」

俺が名前を呼ぶと、伏は嬉しそうにぴょん、と跳ねる。

サラサラの髪もふわりと跳ねる。

「で、お前の行ってる高校に転入届を出して、明日から通うことになった。面倒を見てやってくれ」

「ああ、分かった。まあ、一緒に高校まで送ってくくらいしか出来ないけどな」

「それでいいよ。私、頑張るから！」

何をだよ、と思ったが、そのあまりにも元気な様子を、俺は微笑ましく見ているだけだった。

妹を刺しても死ななかった。

時計は二十二時を回った。

風呂にも入ったし、いつもなら部屋の電気を消して、そろそろ寝る頃だ。

だが俺はどうしようかと迷っていることがあった。

それは、まあ、いつもの日課のことだ。

俺はベッドに入って寝る前に、いつも日課をこなしているんだが、これからはなかなかそれが出来ない。

隣に伏がいて、それが聞こえているからだ。

とはいえ、俺も健全な男子であり、我慢するということはありえない。

だからどうしたもんかと悩んでいた。

ま、悩んでも仕方がない、出来るだけ静かにやるか。

俺はそう思いながら、電気を消して、ベッドに潜り込んだ。さて、じゃあ、やるか、などと思っていた時のことだ。

かちやり

入り口のドアが、静かに開いた。

親父か誰かか、などと思って電気をつけようとしたとき。

「お兄ちゃん？ 起きてる？」

小さな伏の声が聞こえた。

「ふ、伏！？」

俺は慌てて飛び起きて、電気をつけようとする。

伏は入り口のドアを閉めると、そのまま俺にとびかかってきて、俺はベッドの上に押し倒される。

「ぐっ……！！」

風呂上がりのシャンプーの香りと、あとほんのりと伏自身の香り。

柔らかい、伏の身体が俺の胸にのしかかり、俺は全ての動作を停止せざるを得なくなった。

何？

何が起きてんの？

俺の疑問に答える者はいない。

唯一答えてくれそうな伏は、俺の胸に抱きついたまま、俺の耳元にこう言った。

「今日は一緒に寝よ？」

ああ、なんだ。

一緒に寝たかっただけか。

しょうがないな、それならちよつと布団を開けて　　って。

「そんなわけにいくかつ！」

俺は起き上がって伏をどかせる。

「でも、兄妹だよ？　兄妹って一緒に寝たりするものでしょ？」

何の迷いもなく、そんなことを言い出す伏。

なるほど、兄妹だったか。

それなら一緒に寝ても……いやいやいや！

「それは子供の頃の話だ！　高校生の兄妹の話じゃない！」

「でも、お父さんの持つてるゲームやアニメではみんな一緒に寝てるよ？」

あのクソ親父、娘に何てもんやらせてるんだ。

「それはギャルゲやアニメだからだ！」

全く、一般常識がないのかよ、こいつには

「……だめ？」

ベッドの隅に寄り、上目遣いでこっちを見る伏。

そう言えば、一般常識も何も、普通の生活なんて今まで出来てなかったんだよな、この子。

俺の妹なのに、俺すらも会ったことがなくて、この歳まで普通の生活なんてしたことがなかったんだろ？

そう考えると、一日くらい……。

いやいやいや！

駄目だ駄目だ！

伏がいくら無邪気な妹でも、高校生バディを持った女の子であることには一ミリも変わりがないし！

この子がよくても、俺が困る。

隣に女の子が寝てたら俺が眠れない。

子供の頃から妹なら何とでもなるかもしれないが、成長してからいきなり妹と言われても、頭では納得しても、心までは納得していない。

可哀想だが、ここはお引取り願おう。

「なあ、伏。やっぱりさ」

「何、お兄ちゃん？」

声は、俺のすぐ隣の耳元から聞こえて来た。

「……え？」

振り向くと、そこには鼻をぶつけそうな位置に、伏の顔があった。「な、何だ！？」

伏は俺の許可もなく俺の布団に潜り込み、隣に寝ていたのだ。

俺はあまりの顔の近さに、のけぞってしまった。すると、ずい、とその分伏が攻め込んで来た。

「じゃ、おやすみ」

「ちよつと待て！」

俺は慌てて起き上がる。

「もう！ 早く寝ようよ！ 明日から学校なんだから！」

伏に叱られる。

ああ、そう言えば明日からだっとな、伏の学校生活。

初めてだし、期待もあるだろうが不安もあるだろうし、何しろ病気からの復帰だ。体力はあったほうがいいだろう。

「そうだな。悪い。じゃ、寝るか」

俺はもう一度横になり、布団をかけて目を閉じ……。

「ノウツ！」

危うく乗るところだった。

「とにかく！ 自分の部屋で寝ろ！ ほら！」

俺は伏を押し出そうと、手を伏に向けて押し込む。

むにゅう

「きゃあん！」

俺の手は、軽い弾力と共に、伏へと押し込まれた。

ちょうど俺の押し込んだ手は伏の胸に当たり、癖になりそうな柔らかな弾力が、俺の腕力にささやかな抵抗をした。

しかも伏はノンブラジャー！

豊満とはとても言えず、どちらかと言うとやせていて胸もない伏だが、このささやかなふくらみが女の子である事を主張していた。

「お、お兄ちゃん……」

俺がその感触を呆然としつつも楽しんでいたら、伏が切なげな声を上げたので慌てて手を戻す。

「あ、ごめっ！ いやっ！ そのっ！」

妹の胸に手を押し付け、その柔らかさを楽しんでいた俺は、自己嫌悪では済まされないほどの衝撃を受けて混乱していた。

何より、さっきの心地いい感触が忘れられないでいる。

日課も済ませていない俺には、あまりにも刺激が強すぎた。

「？ どうしてもぞもぞしてるの、お兄ちゃん？」

「何でもないです！」

俺は元気なマイサンを抑えようと、必死にこれまでのことを忘却のかなたへと追いやろうとしていた。

「そうなの？ じゃ、そろそろ寝ようか？」

そう言つと、伏は体を俺に寄せ、腕をぎゅっと抱きしめてきた。

ささやかな胸が俺の二の腕のあたりに押し付けられている。

もちろんノンブラジャー！

「いやっ！ おまつ！ ちょっ！」

俺は慌てるが、押せば伏の胸に腕を押し込む事になるし、引けばその分伏が攻め込んでくる。

どっちにしろ、俺のピンチには変わりはない。

俺は身動きが取れないまま、固まった。

「おやすみ、お兄ちゃん」

そんな嬉しそうな声が耳元から聞こえた。

身動きの取れない俺は、それにこう返すしかなかった。

「おやすみ」

目覚めは思ったほど悪くなかった。

うん、あんな状態で眠れるわけがないだろう、なんて思っていたけれど、以外にも早く眠ってしまった。

何ていうか、心地よかったと言ってもいい。

妹とはいえ、女の子の寝息を聞きながら眠りに落ちていくというのは悪くない。

悪くないどころか最高なのかも知れない。

こういうのはあと五年か十年してから体験するものだと思っていたが、こんなに早く経験してしまった。

俺の今後の人生に影響しなければいいんだがな。

ま、そんな事を考えながら目を開ける。

隣にはまだ寝息を立てている伏。

俺はそれをじっと見ていた。

こいつは本当に可愛いんだよな。

何だかんだで親父は人格的にはクズだが、顔は悪くないし、母さんも元々美人だったらしいから、まあ、遺伝子的にも悪くないんだろうけどさ。

それにしても可愛過ぎないか？

いや、まあ、自分の事を言うのは本当に気が引けるが、俺の顔も

親の遺伝子を引き継いで、そんなに悪くはない。

だが、こいつの顔はそういう、前から歩いてきて、お、可愛い、と思う程度じゃないんだよな。

何ていうか、振り返るほどの美少女って言えばいいんだろうか。そのレベルの顔なんだよな。

正直、妹でなければ、俺の理性は破壊されていたかも知れない。おっと、妹の寝顔を覗き込んでニヤニヤしてる暇じゃない。

もう起きる時間だ。

「おい、伏、起きろ、時間だぞ?」

「ん……んにゃ……」

俺の揺さぶりに反応した伏は、それがうっとおしいとばかりに寝返りを打つ。

「そろそろ起きろ! 学校に遅れるぞ?」

俺は更に強く揺さぶる。

「にゃああああ……」

伏はゆっくりと目を開く。

が、また閉じる。

女の子は大抵低血圧だと聞いてたがそれは本当なんだな。

「しょうがねえなあ」

俺は勢いよく布団をはがしてやる。

「どうだ、これで起き……」

俺の動作はそこで固まった。

伏のパジャマは乱れきっていて、何ていうか、胸とかパンツとか丸見え状態だったのだ。

え?

俺の隣で寝てたんだろ?

何でこんな状態になるの?

俺は伏の衣服を直そうか、いや、身体に触れたらどうしよう、な
どと思っっているうちに、伏の目が開いた。

伏の目が徐々に焦点を合わせ、俺を認識した。

「おはよう、お兄ちゃん……」

まだ少し眠そうに目をこすりながらそう言った。

「お、おう、おはよう」

だから俺はとりあえずそう返した。

「ふああああ……」

伏はあくびをしながら伸びをする。

ささやかさんがぼろり、と見えたり見えなかったりする。

眠そうな目でそれを直しながら、伏はベッドから立ち上がる。

「起きないの、お兄ちゃん？」

今度は逆に俺がそう聞かれた。

「お、おう、起きるけどさ……着替えをしてから下に降りていくから、お前も着替えて来いよ」

「うん、じゃあね」

伏がやつと部屋を出て行った。

ふう……。

俺はほつとして、隠していた股間を放り出した。

……いや、これは朝立ちだ。

それ以外の何でもない。

昨日、我慢したからなあ。

俺はマイサンを暴れたままにさせながら、アンニユイにたたずんでいた。

「あ、お兄ちゃん！」

「はひっ！」

俺は腰を曲げてしゃがみこむ。

「……？ どうしたの？」

「何でもない！ 何でもないから！ 用事は何だ？」

俺は必死に股間を守りながら、そう答える。

「えっと、制服の下って何着るの？」

「俺は女子の制服脱がしたことないから知らんっ！」

「そっかあ、分かったよ、ありがとうお兄ちゃん」

何が分かったのか知らないが、伏は俺の答えに満足して出て行った。

俺はほっとして起き上がったが、いつまた伏が入ってくるかと思うと、しばらくは警戒したままだった。

ようやくマイサンが納まったところで、制服に着替え、下に降りた。

「おはよう、母さん」

「おはよう」

俺が座ると、焼かれたトーストとサラダが運ばれる。

俺はそれを食べ、テレビを見ていた。

「おはよう、お兄ちゃん！」

その後すぐに伏が降りてきて、俺に挨拶をする。

さっきまで一緒に寝てたのに挨拶もないもんだ。

いや、それを母さんに悟らせないためにあえて言ったのかもな。

伏の前にもすぐに朝食が運ばれてくる。

あれ？ こいつ今、母さんに挨拶したか？

「ねえ、お兄ちゃんの高校ってどんなところ？」

そんな疑問を考える間もなく、伏が質問をしてきた。

「ん？ いや、普通の高校だぞ？ 変な校則もない代わりに、大抵

の校則もあるって感じの」

「ふっん、普通かあ」

何が嬉しいのか知らないが、嬉しそうにそう言って、期待に満ちた表情でパンを頬張っていた。

「よし、急ぐぞ、さっさと食べるよ」

「うんっ！」

そう言いながら、大きく口を開け、パンを頬張った。

今朝はいつもより少しだけ早く家を出た。

授業が始まるギリギリに学校に着けばいい俺とは違い、伏は転入のための挨拶なんてものがあるからだ。

だから、登校中に会おう奴らもいつもとは違う。

「おはよう拓海くん」

横からの声に振り返ると、そこにはクラスの友達である真希がいた。

長い、手入れされたサラサラの髪が綺麗な同級生だ。

こいつは中学時代から何回かクラスメートになった事もあり、女子の中では一番仲がいい。

ぶっちゃけて言えばこの子は俺に惚れてると思ってるけど、俺はそれに気がつかないフリをしている。

この子は普段はおとなしくてスタイルもいいし、顔も可愛い子なんだが、ちよっとダークというかヤンでデレなところもあり、ちよっと面倒だな、と思うからだ。

まあ、悪い奴じゃない。

「おはよう、真希」

「今日は早いね？」

「ああ、こいつ連れてるからな」

俺は隣にいた伏を指差す。

真希の顔がみるみるヤミの世界へと変わっていく。

「え？ やだ……拓海くんにそんな人がいたなんて……」

「妹だからさ、そのわら人形をさっさとしまってくれ」

俺は真希が手に持っていた人形と五寸釘を、真希の鞆に押し込んだ。

「妹……？」

真希はじつと伏を見る。

伏は物怖じもせず真希に笑いかける。

「……拓海くんと同じ光を持ってる」

「何だよ光って」

ここでオーラとかそういう事を言われたら怖いけど、まあ真希なら仕方がない。

真希はそれには答えずに伏に手を差し出す。

「よろしくね、えつと……」

「伏です」

「よろしく、伏ちゃん」

伏はその手を握り返し、握手が成立する。

「はいっ、よろしくお願いします、真希先輩！」

伏の輝かしい笑顔が、真希と俺を照らした。

あ、光ってこれか。

俺はこんなもん持ってないけどな。

そんなことがありながらも、三人で登校を続け、学校へと到着する。

「じゃ職員室はあっちだから」

「うん、分かった！　じゃ、また後で！」

元気にそう言うと、伏は職員室の方へと駆けて行った。

「元気な子ね……」

「まあな。あれでちょっと前まで病気だったって言うんだからな」

「羨ましい……」

伏の消えていった方向を眺めながら、真希がつぶやくように言う。
「いや、真希だって見た目は悪くないし、笑ってればあんなもんだろ？」

「……妬ましい」

「だからさ、もっと笑……妬！？　何で？　どうして？　俺の妹何か粗相でもしたか！？」

その問いに答えずに、真希は教室へと向かったので、俺も慌ててついて行った。

午前中は伏が気がかりで仕方がなかったが、まあ、授業に集中していないのはいつも通りなのであまり問題もなく昼休みを迎えた。

いつもの昼なら、俺や真希ら数人の友達で昼を食べるところだが、真希を含めて何人かが選択で調理実習だった。

何人かというか、ほぼ全員で、残ったのは俺と斉藤って女子だけ

だ。

男もみんな調理実習やってるからな。

で、その斉藤って奴は真希に悪いからというよく分からない理由で俺との昼食を辞退したので、俺は一人で食べる事になった。

斉藤の恐怖に引きつった笑顔が忘れられない。

真希は普段どんな事やってんだ。

どうせ一人なら普段したことのないことをしてやれ、などと思い、俺は校庭に出てベンチに腰かけてみた。

「ま、食べるのはいつもと同じでパンだな」

俺はそうつぶやきながら、整然とした行列で購入したパンの袋を開く。

「……拓海くんが、一人……」

背後から、いや頭上からそんな声が聞こえてきた。

「かわいそう……かわいそう……かわいそう……」

おそらく真希だが、何だかヤンでるので、放っておく事にした。ヤミモードに入っていると、色々厄介なのだ。

俺はパンを一口頬張る。

「あんな大量生産のパン……かわいそう……」

ほっとけよ、とつつこみ返しそうになるのをギリギリで止める。

「あ、お兄ちゃん！」

向こうから、手を真上に上げながら振って走ってくるのは伏だ。頭上の声とは違い、底抜けに明るい声だ。

「羨ましい……妬ましい……嫉ましい……」

声のヤミ度が深まって行っているが、気にしない。

おそらくこの後呪詛が聞こえてくるが、いちいち相手にはしていいられない。

カッ！

大きな音がしたので、隣を見ると、包丁が突き刺さっていた。

「おまつ！ 危ないだろ！」

これには思わず突っ込んでしまった。

「嬉しい……構ってくれた……」

校舎の三階の窓。

目が見えるか見えないかの頭部が見え隠れする。

あんなところから包丁落としたら危ないだろうが。

だが、いちいち上って怒りに行くほどでもないし、それはそれであいつを喜ばせるだけだ。

とりあえず包丁を抜いた。

後で返しに行こう。

「どうしたの、お兄ちゃん？」

やっとこつちに到着した伏が聞いてくるが、この状況をどう説明したらいいかな？

「いや、実はさ、真希が三階からこの包丁を」

俺が包丁を伏に見せようと、前に出した瞬間の事だ。

「あっ！」

伏が何かにつまずいて転ぶ。

俺はそれに気づき、抱き止めようと、手を出す。

その手に包丁が握られている事を忘れて。

ざくり。

「あ……」

嫌な、感触がした。

「ふ……し……」

伏の鳩尾の下辺り。

そこに、包丁は深々と刺さっていた。

柄を持っているはずの俺の手が、伏の腹に接触するくらい、刃のすべてが伏の体内に飲み込まれ、伏の細い体軀を貫こうとしていた。俺は状況を飲み込めずにいた。

いや、飲み込みたくない、理解したくないという心の抵抗が、理解を遅らせていた。

顔に降りかかってくるのは、俺の妹の髪と、シャンプーの香り。力なく俺にしなだれかかって来るのは、俺の妹の身体。状況は変えられない。

伏の温もりが伝わって来るほど、その現実を受け入れざるを得なかった。

俺は、伏を包丁で刺した。

出来たばかりの妹を殺してしまった。

頭が真っ白になる。

手の震えは止まらない。

悲しいとか、怖いとか、そんな感情とは違う、人を殺したという受け入れられない重みをただただ感じていた。

息苦しくなってきた事で、やっと自分が息を止めている事を理解し、大きく息を吐いた時。

「いったあああ！」

伏の明るい声が聞こえた。

「……へ？」

なんだ？ 何が起こったんだ？

「痛いよもう！ お兄ちゃんってば！」

伏はもぞもぞと立ち上がり、刺さっていた包丁を、ぼん、と引き抜く。

「ええっ！？」

包丁をベンチに置くと、くるん、と俺を振り返る。

「お兄ちゃんはいつも一人でご飯食べてるの？」

何事もなかったかのように、聞いてきた。

「いやいやいやいや！」

この数秒のあまりの非現実的な光景に、俺が混乱していなかったと言えは嘘になる。

「え？ きゃあっ！」

俺は伏の制服をまくり上げ、包丁が刺さった辺りの腹部をまさぐってみた。

薄い筋肉と、薄い脂肪、薄い皮膚。
それに小さなヘソ。

他には何もなかった。

傷一つない、白く綺麗な肌があった。
どういうことだ？

俺の気のせいだったってことか？

いや、そんなわけがない！

俺は確かに、伏を刺した。

感触もあつた。

だけど、現に刺した痕がない。

どういふことだ、これ？

俺が夢でも見たって言うのか？

「お兄ちゃん……恥ずかしいよ……続きは帰ってから……」
え？

伏が妙に艶っぽい声で言うので正気を取り戻した俺。

俺は伏の制服をまくり上げ、腹をまさぐっていて、伏はそれをどうしてだか、上気して受け入れていた。

「わ、悪いっ！」

俺は、慌てて、伏を離れた。

伏は少し恥ずかしそうに制服を直す。

「……呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪」

頭上からは既にヤミを超えてひどい有様になっていた。

だが、俺はもう聞こえないふりをした。

それどころじゃない。

「伏、お前一体、何者なんだよ？」

目の前にいるのは妹と称する、刺しても死なない怪物。

俺は少しだけ恐怖を感じた。

「何者って、お兄ちゃんの妹だよ？」

「嘘つけっ！ 本当は何なんだよ！ 何で俺んちにいるんだよ」

こいつは妹じゃない。人間ですらない。

そんな恐怖が俺を支配する。

冷静であつたとは言えないだろう。

あんなもんを見せられて冷静でいられるわけもない。

「……それでも」

伏は少し悲しげに微笑み、だが強い強調を込めて言う。

「私は、お兄ちゃんの妹だよ？」

「……………！」

その、あまりに強い、言い換えれば必死の表情に、俺は次の言葉を口には出来なかった。

こいつにも色々事情があるだろう。

それも考えずに化け物扱いしたのは確かに悪かったかもしれない。だが、それで何が変わるわけじゃない。

化け物であろうがなかろうが、こいつが刺しても死なないのは事実だし、俺の家で俺の妹を名乗って住んでいるのも事実だ。

「怒ったりしたのは悪かった。だが、本当のところを教えてくれ。

お前が俺の妹かどうかもそれで決める」

俺はなるべく冷静な態度で、伏に向き合って、そう言った。

「……分かった、ちゃんと言うよ」

伏が少し寂しげにそう言った。

「でも、ここじゃ言えないんだ。家に帰ってから、お父さんと一緒に言うから」

そう言うって最後に寂しげに笑いながら走り去って行った。

俺はただ、去っていく姿を見つめるだけだった。

妹が俺に迫ってきた。

幕間 研究者の陰謀

「店主を呼べ！」

「な、何よ急に」

驚いて箸を落としそうになる結衣。

「今は鮎の季節にあらず！　これが季節の魚とは片腹痛い！」

「別にいいじゃないのよ。この季節だって鮎は獲れるでしょ？」

「所長は分かっています！　季節の魚とは、その魚が一番おいしい時期のものですよ」

「あんたがそんなに季節の魚にこだわりがあるとは初耳だわ」

「奇遇ですね、僕もです」

平然と言い返す樋田。

「今後フィッシュアンドチップス以外の魚は食べるな！」

怒りに任せて立ち上がる結衣。

「それは我々英国国民への侮辱ですか？」

「ち、違いわよ。祖国を馬鹿にしてごめんな……って、あんた生粋の日本人じゃないの！」

「私の祖母の友人が英国人なのです」

「へえ、そういう関係……って、やっぱり生粋の日本人じゃないの！」

結衣が勢いを削がれて座る。

「もう、樋田はああ言えばこう言う！」

「科学者とはそういうものです」

市街地のホテルにある料亭の一室に、似つかわしくない二人の客。結衣と樋田は、そこで昼食を食べながら、一休みしていた。

今日は朝から市役所や郷土資料館や図書館などを廻り、不老不死に関する情報を探して回った。

「しかし、こうも資料が乏しいところも珍しいですね。少なくとも噂になれば、それなりの記述が残っていても良さそうなものを」

「それは逆に真実に近いって事じゃないのかって思うのよ」

「まあ、言いたいことは分かります。権力者は真実こそ隠したがりますからね」

「そうよ！　ここに残る史実としては、昔この地に風楼神社という神社があつて、そこに不老不死の生き神を奉っていた。でも、それが不老不死だと周りに広がって、幕府や大陸からもそれを欲しがる輩が現れて、風楼神社は何者かに壊滅させられた、という事」

結衣が鮎の小骨を取りながら話す。

「でもね、いくら風楼家が壊滅したとしても、その神が不老不死なら生き残ってるはずよね？　それがそこで史実から消えている。幕府とか大陸にさらわれたという可能性も、もちろんあるんだけど。」

「だとしたら、これだけ情報がないのは怪しいのよね。地域の生き神がいる神社が潰され、生き神が行方不明。これって歴史的な大事件だと思うわ。なのにほとんどその形跡が残ってない」

「ふむ。それが出来るのは、領主、もしくは幕府ですか」

「幕府がいくらそれを強制したところで、藩主がそれに乗り気でないなら書物の一冊二冊、隠しておくくらい出来たはずよ。幕府が領主に圧力をかけられるなら、そもそも最初から領主に引き渡せと命じればいいだけで、神社を壊滅させるなんて強攻策を取る必要がないわ」

鮎の小骨が取れないまま、諦めて話に熱中したふりをする結衣。

「領主が、その事実を強制的に消した理由は色々考えられるわね。」

「生き神という嘘で人心を支配してきたので、殺戮されたのがばれるのを隠したか、もしくは、生き神を外敵から保護するために、存在する事実自体を消し去ろうとしたか」

「ふむ。つまり、領主が意図して隠したと。所長は歴史学者にでもなつたらどうですか」

「歴史に興味があるわけじゃないわよ。ていうか、ここに来て茶化

すなっ！」

樋田は綺麗に骨だけ残した鮎をつつきながらいつものように平然と結衣を見返す。

「で、所長は生き神がいたと踏んだのですか。おそらく、市役所辺りで、でしょうかね？」

「そうよ、あの市役所の職員の態度。あからさまに怪しかったのよね。私たちは不老不死の人間を探してる、なんて馬鹿正直に言わずに、各地の不老不死伝説を研究しているって言っただけなのに、何故だかそんなものはありません、の一点張り。歴史的に少ないけど資料があるのに。普通なら資料館を紹介するとかその程度はしそんなものでしょ？」

「くそ生意気そうながきにわけの分からない事を聞かれたからイラストと来たんじゃないですか？」

「誰の事よ！」

「誰の事だと思えますか？」

「……樋田」

「惜しい」

「どうでもいいわよそんな事。それよりも」

「正解は所長でした」

「だから、言わなくてもいいわよ！」

ばんばん、と結衣が机を叩く。

その手の先で鮎の乗った皿に手が当たってしまい、結衣の食べかけの鮎がふわり、と宙を舞う。

「あっ、あっ！」

慌てる結衣をよそに、樋田が自分の箸でその鮎を受け止め、そのまま結衣の口に突っ込む。

「むぐっ！ むぐぐううっ！」

魚をくわえた状態の結衣は、抗議しようにも、口が開けない。

「ま、所長がそう言うのでしたらもう少し調査しましょうか。神社についてならもう少し資料もありそうですし」

「むぐ」

下ろせばいいものを口にくわえたままの状態の結衣。

「ところで、所長は不老不死の人を見つけてどうするつもりなのですか？」

「むぐ？」

「いえ、だから万一所長の滑稽な妄想が現実だったとして」

「むぐむぐう！」

何か怒っている結衣だが、いつも以上に樋田には通用しない。

「その人をどうするつもりなのですか？」

「むぐ」

「むぐでは分かりません。もっと人間らしい事言ってください」

「むぐう！」

結衣は唇を動かして鮎を口の中に押し込んでいく。

そして、そのまま鮎をバリバリと尾頭骨付きで食べ始めた。

「あなたは猫ですか」

「だから、見つけたら、当然」

「そんなことより、これから語尾ににやんとつけてください」

「にやん？ だから、見つけたら当然研究するにやん！」

案外素直な結衣が、語尾ににやんとつける。

「研究と言っても、不老不死なら生きている対象ですよ？ どのようになにを研究するのですか？」

「私たちの得意分野から行けばまずは細胞を採集して普通の人間との差異を研究するにやん。あと、アポトーシスの観点から、細胞の入れ替わりのパターンを見てみるにやん」

「そんなに簡単に協力してくれますかね？」

「協力させるのにやん！ どんな手を使っても……にやん」

結衣は悪そうに笑うが、その口調に幼くて可愛い顔の彼女は、どう見ても悪役面は出来ていなかった。

「最後のにやんは後でとってつけましたね」

「ちょ、ちょっと忘れただけにやん……って、どうして私がにやん

とかつけないきゃならないのよ！」

「自分でノリノリで付けはじめたんじゃないですか」

「……そうだったっけ？」

「全く、自分で言い出したことで怒るなんて」

「ごめんなさい……あれ？ 何か違う気がする？」

結衣が首を四十五度に傾ける。

彼女のツインテールがアンバランスに垂れ下がる。

「そんな事どうでもいいじゃないですか。それよりも不老不死の方が大切でしょう？」

「うん、そうだけど」

結衣は納得いかなそうな表情をするが、樋田はそれに構わない。

「じゃ、そろそろ行きますか。食べ終わった事ですし」

樋田がゆっくりと立ち上がる。

「待つて！ デザートがまだ来てないわよ！ 今日のデザートは季節のスイーツなのよ！」

「そんなものに興味はありません。行きましょう」

樋田は結衣の手を引く。

「行かない！ やだっ！」

結衣が座り込む。

「駄々をこねないでください。面倒です」

樋田は結衣を抱えてでも運ぼうとした。

「いいいいいやあああああっ！」

結衣は全身で暴れて抵抗する。

「デザート食べなかつたら、午後ずっと駄々をこね続けるわよ！」

「厄介にも程があります。何のためにここにいてるんですか」

「樋田が季節の魚を食べたいと言ったから！ 樋田だけずるい！」
所長の威厳どころか、十七歳としてどうかというレベルで言い返す結衣。

樋田は深いため息をつく。

「まあ、分かりましたよ。食べたらもう駄々をこねませんね？ 今日一日くらい」

「うん！」

結衣は嬉しそうに答える。

樋田はやれやれと席に戻った。

「まさか、こんなにも早くばれるとはなあ……」

親父が苦笑する。

俺はその顔にイライラしていた。

急いでいるときほど時間の経つのは遅く、午後の授業はとても長く感じたがそれでもやっと終わりが来た。

俺は友達の誘いを無視して、ダッシュで家まで帰ってきた。

そして、カバンもそのままに親父のいる居間のドアを開けたのだ。そこには何故か既に伏がいた。

着替えまで済ませてるって事は一限早く終わったのだろう。

で、事情を全て伏から聞いたであろう親父が、俺が何かを聞く前にそう言ったのだ。

俺がイライラするのも分かるだろう。

「で、あんたも知ってるなら話せよ。伏は何者なんだ？」

「お前の妹だ。戸籍もある」

親父が真顔のままそう言ったので、俺のイライラは頂点に達した。「ふざけんなよ。包丁で刺しても死なないような血が俺にも入ってるって言うのかよ？」

「いや、入ってないな」

冷静に答える親父に腹が立つが、ここで暴れると何も聞けないのでこらえる。

「だから、何者なんだよ、伏は！」

びくん、と伏が驚く。

こいつには悪いとは思うが、俺の経験上、親父はこうまで言わないと駄目だ。

「分かった。答えようか。だが、まず最初に約束してくれ。この話は、絶対に誰にも言わないでくれ。これは私やお前だけの話ではないのだ」

親父のあまりに真剣な表情。

「……分かった」

俺はそれに飲まれつつも、そう答えた。

事実が分かればそれでいいし、元々隠し事を人に喋る趣味もない。「言わなかったのは悪かったな。最初に言ってもどうせ信じてもらえないと思ったからだが」

「そうか。まあ、それはいいや」

どんな秘密かは分からないが、確かに伏は刺されても死なないんだ、とか言われてもまず信じなかっただろう。

親父は立ち上がり、伏の肩を叩く。

「この子はな、不老不死なんだ」

親父は少し微笑んで、伏は少しうつむいて、俺の反応をうかがう。だから、俺はすぐには何の反応も出来なかった。

「そうかよ」

そう、ほぼ無表情で言っただけだ。

まあ、ある程度は予想できた事だ。

もちろん、刺した一件がなかったら信じすらなかったが。

「こう見えて既に何千年も生きている。死ぬ事はないし、死ぬ事は出来ない」

伏はじつと俺の様子をうかがっている。

俺は驚くことすらためらった。

「生き神様と言われていた頃もあるが、今ではその信仰はない。だが、我々風楼家は、代々この子を世話し、世間から隠すという使命を仰せつかっているんだ」

不老不死の生き神様。

それを代々守っているのが風楼家。

ってことは、俺も守るって事なのかよ？

「彼女はほとんどの時を屋敷にこもって暮らして来ていたんだ。それは風楼家が自らの使命を果たすにはとても都合がいい手段だと思うんだが、よく言っても幽閉なんだ。私もそれを知りつつ彼女を隠していたんだが、可哀想に思えてな。十五年前、戸籍を提出してこの日を待ったんだ」

静かに、穏やかに、親父が言う。

「……つまり、戸籍も十五年前にダミーで出して、それが通用する歳になったから出てきたって事だな？」

「いやまあ、それはそうなんだが、それだけじゃ、いくらなんでも小中行ってない時点でおかしいと思われるだろ？ その辺は市とうまくやっている。と言うか、今は市が我々にこの使命を与えているんだぞ。昔は領主だったらしいがな」

「なんだかよく分からんが、つまり市も結託してるんだな？」

「ああ、この事実は市役所でも一部の者しか知らないがな。補助金も出てるんだぞ」

何の名目で出てるんだろうな、それ。

「ああ、だからあんたニートでも生活出来てるのか」

俺の長年の疑問が解けた。

俺が生まれたときから親父はニートだし、母さんは専業主婦だった。

それが普通だったので何の疑問にも思わなかったが、学校に行って友達と話をすると、それがおかしいという事には気づいていた。うちはどこから収入を得ているのか？ と。

だが、親父も母さんもはぐらかせて教えてくれなかった。

大方、遺産か何かあつてそれで生活しているんだなと思っていたんだがそうじゃなかったようだ。

「そうだ。だからお前も頑張って就職しなくてもいいんだぞ？」

「いや、俺は働く気だな」

「何故だ？　一緒にノンタックスペイヤーになろうじゃないか！」

「何だそれ」

「所得税を払わない消費者」

「なるかつ！　納税者に謝れ！」

親父がいつもの調子になったので、俺もいつものように怒鳴った。その間で、伏が心細そうに俺たちを見上げていた。

「あー、悪いな伏。俺たちは深刻さの足りない家系だからさ、なんかもう、それでいいや」

「それでいいって……？」

恐る恐る、といった表情で伏が聞く。

「まあ、お前は俺の妹だし、俺の家族だ。お前を守るのが使命なら守ってやる。それでいいんだろ？」

深刻さとか真剣さのかけらもない。

降って湧いた信じられない話。

一族の使命だとか、俺の役割だとか、そんなものを聞かされたわけだけどさ。

重い話に重い使命なんだろうけど、それを受け入れることに身構える必要なんてない。

「本当に？」

「ああ、本当だ。これから俺をお兄ちゃんと呼べ」

「お兄ちゃん！」

伏は嬉しそうに俺に飛びついた。

柔らかな感触と女の子の匂い。

「はははははははは」

妹と決めた、でも妹じゃない女の子の抱きつきに、俺はただ乾いた笑いしか出なかった。

長かった一日がやっと終わり、寝る時間が来た。

今日は色々あったな、などと思い出すまでもなく、色々な出来事が思い返される。

まあ、一言でまとめれば、俺の妹は不老不死で、俺が妹を守っていくって事でいいのかな。

あの後親父に致命されたのは、死なないからといって、わざと伏を傷つけたり、殺そうとしたりするなって事だ。

死なないといっても痛みはあるから、死なない分、治るまで激痛と戦わなければならない。

まあ、それは確かに分かる。

刺されたら痛いだろうし、実際今日も刺されてしばらくは痛みで声も出せなかったしな。

それにどこで誰が見ていて、ばれないとも限らない。

昨日今日じゃない、何百年何千年守り通してきた秘密を、俺の代でばらすわけには行かない。

軽いノリで受けた事だが、そこだけはしっかり守ろうと思う。

そう思いつつ、俺はベッドに入り、電気を消す。

明日も伏と学校へ行くんだな、なんて思うと、少しだけ嬉しかった。

「お兄ちゃん？ もう寝た？」

かちやり、とドアが開き、その向こうから小さな声で伏が俺を呼ぶ。

「起きてるけどさ、また一緒に寝」

俺が言い終わる前に、伏は俺のベッドに潜り込んで来た。

「えへへ、来ちゃった」

風呂上りの伏はシャンプーとか石鹸の香りが漂う。

「来ちゃった、じゃない！ 帰れ、今日からはもう帰れ！」

こいつは俺とは血のつながっていない女の子だ。

妹だけど、そういう関係になることに止め処はない。

そんな女の子と、一緒に寝るって事は、どこにも歯止めのかけようがない。

「どうして？ 妹なのに？」

「普通の兄妹は高校生にもなって一緒に寝ない！」

「別に普通じゃなくていいよ？」

「レッツ普通！」

俺は伏を追い出そうとするが、また変なところを触らないように、頭を押し出そうと思うが、伏はくると首を回し迫ってくる。

肩や手ならいいんだろうけど、触ろうとして変なところに触る可能性があるため、慎重に掴むしかない。

ああっ、こいつは何でこんなにいい匂いするんだよ！

誘惑に負けそうじゃないか！

「えへへ。お兄ちゃんのマウントポジション取った！」

気がつく俺は、伏に馬乗りになされていた。

尻とか股間とかが俺の腹に密着して大変な状態ですよ？

「ノーモア普通！」

そう言いながら、伏はそのまま倒れこみ、俺にしがみ付く。

「ぶるあああああっ！」

伏の足から太ももから股間から腹から胸から腕から頬までが俺の身体に密着する。

シャンプーの香りだけじゃない、少し動いたからか、伏の汗の匂いまでする。

伏の柔らかい全身と、この匂い。

冷静でいられる青少年がいたらお目にかかりたい。

「あ、おっきくなってる！」

伏が俺の股間を遠慮なくむんず、とばかりにつかむ。

「フオオオオオオオッ！」

俺は思わず悲鳴を上げる。

「いやっ、これはその、そういうもんなんだよ！」

血がつながってないとはいえ、妹と決めた女の子相手に股間が元気になった俺は深い自己嫌悪と自己主張の狭間にいた。

「いいんだよ、これが目的なんだから」

伏がにこり、と笑いながら言う。

「目的って、何だよ？」

俺の股間を握る事とか、俺のマイサンを元気にさせることが目的なわけでもないあろう。

「あのね、私は長い間生きてきて、風楼家の人たちに先祖代々守ってもらって来たの。それは嬉しいことだし、本当にありがたいと思っ
っているんだ」

伏は、最上級の笑顔を俺に向ける。

俺の股間を握ったままで。

「でもね、そうやって仲良くなった人も、みんな死んじゃうんだ。仕方がないことだけど、寿命ってものがあって、その時が来ればみんな死んじゃうの」

今度は一転して、悲しそうな寂しそうな表情になる。

俺の股間は、まだ握ったままで。

「それでね、いい事を思いついたの。風楼家の男の子と一緒になつて、私が風楼家の赤ちゃんを産むの。それでね、その子に守ってもらうの。その子が死んでも私の孫が、孫が死んでもひ孫が、私を守ってくれるの！」

伏は凄い名案とばかりに熱く語る。

「素敵だと思わない？ 私は私の子孫をずっと見続けていられるのよ！」

興奮で股間を握る手が強弱するのが気が気でないが、伏の言いたい事は分かった。

だが、いきなりそんな事を言われても困る。

いや、伏は可愛い子だし、付き合ったり結婚したりする事に問題があるかといえば、まあ、ない。

だが、いきなりここで今から子供を作りたいと言われれば、そりゃあドン引きものだよな。

「いや、伏、物事には順序ってものがあってだな」

「上の口ではそんなこと言ってても、下の……えっと、鼻は正直だよ？ いやらしいお兄ちゃん」

伏は、元気過ぎるマイサンを、親指でいじくる。

「こんな状況でこうならない方がおかしいんだよ！ 男ってそんな動物なんだよ！」

「いいよ、お兄ちゃんだから許してあ、げ、る」

伏がもう一方の手で、俺の鼻をつつく。

「その代わり頂戴ね」

「……何をだよ」

「こ、だ、ね」

「ノオオオオオッ！」

「動かないで！ 動くと潰すわよ！」

伏が股間を強めに握る。

俺は全ての動きを止めた。

それを潰されると、俺はもう生きていけない。

少なくとも男として死んでしまう。

「やめろ、伏！」

「やめろ？ あれ？ お兄ちゃん、自分の立場分かってるのかなあ？」

「やめてくださいっ！」

俺は恥も外聞もなく言われたとおりに従った。

「何で親父の代にしなかったんだよ」

伏が不老不死なら当然親父の若い頃にも出会っているわけで。

その時にやってってくれていたら、俺も半分くらい不老の血が入ったかもしれない。

「勝徳さんにもね、やったんだよ？ でも、あの人ガードが超固くて。しかもいきなり結婚するし！」

ああ、結婚したら手を出さないのか。

そういう律儀さというか真面目さはあるんだな。

「……あの、泥棒猫」

さっきまでとは全く違う声で、伏は物騒に呟いた。

「その猫って俺の母さんの事か！？ 母さんは優しいからそっとしておいてやってくれ……ください！」

「ふーん、そう言えばあんたにもあの女の血が流れてたわよねえ」
俺の目を睨みつけながら、股間をにぎにぎと揉みはじめる伏。
さっきまでとは雰囲気も変わってる。

やばい、俺、狩られる。

「ま、過去の話はいつか。お義母さんだしね」

いや、確かに伏は俺の義妹で、母さんは義母だけど！

「勝徳さんに振られて十数年。私はお兄ちゃんから子種をもらった
め、あらゆる作戦を立てたのよ。もう、作戦は遂行中よっ！」
にやり、と笑う伏。

「いや、よく考えたら、潰したら一番困るのは伏じゃないか？」

俺も困るけどさ、何より俺の子種が欲しい伏も困るだろ？

「それなら仕方がないから、お兄ちゃんの子供にアタックするまで
の話だよ！」

「いや、潰されたら子供作れないし」

「……っ！」

伏はそれに初めて気づいたようで、驚いた顔をしていた。

「よ、養子を取ればいいじゃない！」

「俺の股間潰す奴のために、誰がそこまでするか！」

「くっつ！ でも！ 潰すからっ！ 動いたら潰す！」

開き直った。

これじゃあ俺も動きようがない。

「とにかく、落ち着こう、な？ 冷静になって考えてみよう。大人
になってからでもいいんじゃないのか？」

俺はとりあえずこの場を逃れるために伏の説得をする。

このまま妹に無理やり犯される初めてって十字架を一生背負わな
ければならないのは嫌だ。

「私は成長しないもん。それに、お兄ちゃんだけ成長したら、私の
事、子ども扱いするようになるもん！」

「いや、なんで中途半端な年齢で止まってるんだよ。せめて精神だ
けでも成長しろよ」

「昔はこの歳が結婚適齢期だったの！」

うん、見た目については分かったけど、精神的にはもつとこう、千年生きた威厳みたいなものを見せてくれないと！

「さあ、そろそろ観念して。天井の模様数えてる間に終わるから」

「嫌だ！ そんな女の子みたいな初体験嫌だああああっ！」

抵抗しようにも、人質に取られたマイサンがいるので動けない。

「ふふふ、諦めておとなしくなつてね、お兄ちゃん」

「くっ……」

もう、駄目なのか。

このままやられてしまうのか？

この歳でお父さんは辛い。

永遠に可愛い嫁と暮らすのは悪くないけど、俺もまだ色々したいことがある。

「ちよつと待つてね……あれ？ んしょ……」

俺がほぼ観念していると、伏が何だかもぞもぞしている。

その度に俺の股間もぞもぞとなり、なんていうか、変な気分になるんだけど。

伏を見ると、どうもパンツを下ろすのに一苦労しているようだ。

片手、しかも利き手で俺の股間を掴んでるから、もう一方の手一本で下ろす事になる。

膝までは簡単だが、そこからが難しい。

立ち上がるなら、俺の股間から手を離さなければならぬ。

伏はあっちに行ったりこっちに行ったりしつつ、一生懸命脱ごうとする。

俺は、伏の白い尻があっちに振られたりこっちに振られたりするのをただ、見ているしかなかった。

見ているしかない、というのはあくまで俺の話で、俺のマイサンはその様子を見て大暴れしていたわけ。

伏の尻は、身体全体の線が細いので決して安産型ではないが、形が綺麗で、見ているだけでかぶりつきたくなるようないい尻だ。

そんなもんが目の前で動いているんだから、無感動無関心でいられるほど達観した聖人にはなれない。

完全体になったマイサンは伏の手を押しどけるため、伏はマイサンのみを握っていた。

これで少なくともギョクを潰される心配はなくなった。

今のマイサンなら、多少の攻撃には耐えうるだろう。何故なら、完全体だからだ。

「よし、脱げたっ！　じゃあ行くわよ、お兄ちゃ……きゃああっ！？」

一瞬の隙を突いて俺は、伏の腕を引っ張り、倒した上に乗り、伏の肩をベッドに押し付けた。

それでも伏はマイサンから手を離さなかったが、俺が振り解く要領で股間をひねったら、あえなく手を離れた。

「な、なによお兄ちゃん。私と一つになるのがそんなに嫌なの！？」悔しさに泣きそうな表情で伏が訴える。

ああ、これが敗者の表情か。

俺は余裕を持って組み敷いた伏を、上から眺めていた。

「まだ、やりたいことがあるんでな」

俺が格好つけてそう言った。

「やりたいことってどうせ女遊びでしょうが！　そんなものしなくたって私がずっと相手してあげるから！」

格好つけた俺の言葉に泥を擦り付ける伏。

女遊びって言われると、間違っちゃいけないけど、ちょっと違う気もしないでもない。

「いや、それだけじゃないからさ。もっとこう、恋愛とか結婚とか家庭を持ったりとか、そういう事を普通にしたいんだよ」

「結局女遊びでしょうが！　そんなの全部私がさせてあげるわよ！」

いや、何ていうか、そうじゃないって言うか、そうなんだけどさ！　出会いとかわくわくとか、そういう希望みたいなものが欲しいんだよ。

「別に伏が嫌ってわけじゃない。俺はさ、もう少し希望みたいなものが欲しいんだよ」

「希望が欲しいなら私がいくらでもあげる！ 希望でも恋でも肉体でも何でもあげる！ だから私にしてっ！」

伏が俺の下でばたばたともかく。

駄目だ、このままじゃ埒があかない。

「おい、うるさいぞ、もう少し静かに」

いきなり俺の部屋に入って来たのは親父だが、俺たちの様子に言葉を止める。

俺は自分の格好をふと思い返す。

俺はマイサンを極限まで大きくさせて、伏を組み敷いている。下半身裸の伏が、俺の下でもがいている。

「あー……」

「いやっ！ 違うから！ 俺が襲ってんじゃなくて、俺が」

俺が慌てて親父に弁解をしようとして、肩を上げてしまった。解放された伏は、俺から逃げ

「お兄ちゃん馬鹿ああっ！」

俺の股間を思いつき叩いて叫ぶ。

「ぎゃあああああっ！」

その地獄の苦しみに俺がもがき苦しんでいると、親父が一言言った。

「……邪魔したかな？」

「邪魔じゃねえっ！ むしろベストタイミングだったけどっ！ それはそうと息子が息子を殴られた姿をこれ以上見ないでっ！」

「ああ、じゃ、また明日」

「あ、伏連れ帰ってくれ！」

俺が転げまわっている間に、また二人きりにされたら、今度こそもう終わりだ。

「伏なら部屋に帰ったよ。今日はもう来ないんじゃないかな？」

ようやく痛みが徐々に引いてきたので、周囲を見回すと、確かに

伏はいなかった。

俺はほっとしてベッドに寝転がる。

こんな攻防がこれからずっとあるのかと思うと恐ろしい。
早いところ諦めて軍門に下った方がいいのかも知れない。

それで何か失うものがあるのか？

可愛い妹が彼女になり、甘く退廃的な生活が約束されている。

俺は何を恐れている？

何を失うと思っている？

ああ、そうだ。

男の、プライドだ。

女の子に無理矢理初めてを奪われるという事態に抵抗したいだけ
なのだ。

だったら、自分から襲えばいいか？

いや、そんな簡単な問題じゃない。

これはもつと根が深い問題だ。

いや、そんなこともないかも知れないが、もつとこう、複雑なの
だ。

俺は絶対、伏に貞操を奪われない。

そう誓って眠りに着いた。

ちなみにマイサンはまだ起きていた。

妹が呪い殺されたけど生き返った。

「おはよう、お兄ちゃん！」

朝起きて台所へ向かうと、昨日の事など何もなかったかのように、伏が明るく挨拶をする。

「ああ、おはよう？」

俺はぎこちなく挨拶を返す。

「今日も一緒に学校行こうねっ！」

ここまで明るいと、昨日の事にこだわっている俺の方がおかしい気がしてきた。

俺はそそくさと朝食を食べる。

俺がここで飯を食べている限り、伏はここにいるだろう。

そして、朝のこの時間は母さんもここにいる。

昨日の話を聞いてから、伏と母さんを一緒にさせるのが怖くて仕方がない。

あの、吐き捨てるように母さんを「泥棒猫」と言い、すぐに言い直したが、あの感情は本物だっただろう。

まあ、伏からすれば母さんは親父を横から奪った泥棒猫なんだ。今では嫁姑にしか見えないが、それでもその修羅場を俺は見たくない。

俺はいつもの倍の速度でパンを食べて立ち上がる。

「じゃ、そろそろ行くか！」

いつもよりも早い時間だが、そう伏に言い、俺は部屋に鞆を取りに戻る。

「うんっ！」

すでに鞆を用意してあった伏は、玄関へと先に向かう。

伏の待つ玄関へ急ぎ、家を出た。

「行ってきます」

「いつてきまーす！」

俺の声に続き、伏が声を上げ俺たちは学校への道を歩き出した。

「……ふう」

俺は、まずは一安心だった。

女の修羅場つてのがどうにも好きになれない。

俺は小学の時も中学の時も、女の修羅場つてので嫌な思いしてるからな。

「ねえ、お兄ちゃん？」

自分の腕を俺に絡めながら、伏が言う。

「何だ？　って言うか、離れるよ、変な誤解されるだろう！」

俺が腕を振りほどこうとするが、伏がギュツと強く腕を抱きしめる。

ていうか、胸当たってる。

振りほどこうとすると、胸に肘を押し込まなければならぬので、身動きが取れない。

「じゃあ、誤解じゃなくせばいいんじゃないかな？」

伏がにやり、と笑う。

油断してたな、さすがにここでは仕掛けて来ないと思ってたんだが、まさか、ここで来るとは。

こうして事実上の仲の良さを見せつけて、女を遠ざける作戦だな。そうはさせるかよ！

「あ……拓海……くん……？」

背後から妙に震えた声がする。

ああ、この時間にはこいつが登校してくるんだな。振り返るまでもなく、そこには真希がいた。

ああ、既にヤミモードだ。

「おはようございます、真希先輩っ！」

そんな空気を読んでいるのかいないのか、伏が明るく挨拶をする。そんな……妹だと思って安心してたのに……」

狼狽とヤミ化で震える真希の手には、五寸の釘。

「いや、まあ、落ち着け、真希。これはな……」

真希に事情をどう説明しようかと考える。
いや、待てよ？ 説明する必要があるか？

真希は普通にしてれば可愛いしヤミ化しなければ性格も悪くないが、あのヤミだけは厄介だ。

こいつのせいで他の女の子が寄って来ないって事もあるからな、もしかすると、このまま黙ってた方が離れてくれるもんかな？

「ひどい……妬ましい……憎い……」

ぼろぼろと大粒の涙を流す真希。

「あ、いや、真希？」

残念ながら、俺は女の涙の前に非情には慣れない甘い男だ。

「伏、そろそろ離れるよ、誤解されるだろ？」

俺は伏の腕を振りほどこうと、胸に肘を押し込む。

肘に柔らかな感触を感じる。

ああ、くそっ！

伏の身体が病み付きになったらどうするんだよ！

それがこいつの狙いだろうけどさ！

「きゃっ」

短い悲鳴と共に、伏が俺の腕を離す。

「まったく……いくら兄妹って言っても、限界があるんだよ。ふつうこんな仲良くないんだならな！」

「あ……伏ちゃんは、ずっと離れ離れだったから、寂しかったのかな？」

徐々にヤミモードから戻っていく真希が笑顔で言う。

「まあ、そんなところだ」

ふっ、何とか落ち着いたか。

本当は伏を利用して、徐々に真希から遠ざかりたかったがな。

ま、真希とはいえ女の子に泣かれるよりはマシだ。

「昨日の夜はベッドでお兄ちゃんに押し倒されたけどね」

そんな瞬間、伏のファッキンジャップがそんな爆弾を投下しやがった。

「あの時私、下半身何か履いてたっけな〜んがんっ！」

俺は慌てて伏の口をふさぐ。

「伏は病気で幻想を見ることがっ！」

俺は慌てて取り繕おうと真希を見るが、その表情はバリバリのヤミモードだった。

「恨苦滅妬怨嫉殺呪死憎……」

何言ってるのかわからないが、とにかく呪いたってのだけは分かる！

「落ち着け、真希！」

真希は俺のわきをすり抜けると、

伏の目の前へ。

「や……め……っ！」

ぶちっ

「痛っ！？」

真希は、伏のセミロングから髪の毛を一本抜くと、そのまま走って行ってしまった。

「……なんなんだ、あれ？」

足の遅い真希の後姿を見つめつつ、俺は啞然としつつそう言った。

「ま、あれで諦めてくれるほどあっさりとした人じゃないけどね」

少しだけ、勝ち誇った表情の伏に、少しだけイライラした。

「ふう……」

風呂から上がり、部屋に戻る。

朝、あんなことがあって、その後学校で真希を見かけなかった。

どこへ行ったかも分からないが、会ったときに登校中だったことを考えると、あの事が原因だったのだろう。

そう考えると罪悪感も大いに湧いてくる。

いや、確かに悪いのは伏だ。

伏があそこまで真希を傷つけてしまったのは事実。

だが、俺も一瞬はあいつを遠ざけるために伏を利用しようとしたのだ。

つまりは俺も同罪だ。

「明日、謝らないとなあ……」

いや、しかし、何を謝るんだろうな、俺。

俺が悪いなんてあいつは思っていないだろうしな。

伏が全面的に悪いと思っけて恨んでるだろうから、伏のフォローをしてやるのが一番かな。

まあ、そうしてやるのが兄としても、真希の友達としてもいいんだろうな。

じゃ、そうするとして、今日はもう寝るか……。

俺は、電気を消して、ベッドにごろん、と寝転がる。

「っ！」

見上げた天井に、伏が張り付いていた。

「ななな、なん……」

なんだお前は、などと言おうとしていたその瞬間、俺の上に落ちてくる。

「ぐふっ！」

俺は伏を鳩尾で受け止めたため、動きが止まる。

「さあっ！ 速攻でイッてもらうわよ！」

伏は動けない俺のズボンを下し、更に自分のパジャマのズボンとパンツも下す。

そのまま俺にまたがって股間の上に乗るこむ。

動きが取れるようになった俺だが、この瞬間には間に合わない。

まずい、やられる！

そう思った瞬間だった。

「ぐっ！」

伏が胸を押さえる。

「く、く、苦しい……」

もがきながら、その場に座り込む。

いつもの演技でもなくマジものだ、これ。

本気で苦しがつてる。

「お、おい、大丈夫か!？」

伏が座り込んだのは俺の腹の上で、俺は起き上がれないので、手を差し伸べて、伏を俺の上へ寝かせる。

俺の腹には伏の股間が直に当たっているのだが、今はそれどころじゃない。

「あ……あ……あの女……本物だったとは……」

俺が頭や背中を撫でてやるが、伏はもがき苦しんだままだ。

「あの女って誰だ?」

「ま……真希ってあの女狐が……」

そこまで言くと、伏はこと切れた。

「え? 伏? おい、伏!？」

俺は伏を揺さぶる。

なんなんだこれは!

何が起こってるんだよ!

俺はベッドに伏を寝かせる。

まさか、死んだのか?

俺は、伏の胸の下に耳をつけてみる。

心音がしない。

何でだよ!

不老不死じゃなかったのかよ!

「伏っ!」

俺はもつと強く胸を押し付け、心音を探す。

伏は寝るときブラジャーをしていないので柔らかな胸の感触がそのまま伝わってくるが、今はそれどころじゃない。

俺は伏の胸の周りに耳を押し付けて聞いて回った。

とくん

ん？

とくん、とくん

動き出した？

生き返ったのか？

なんだか分からないけど生き返ったみたいだ！

「……お兄ちゃん……激しい……」

伏の胸に顔を埋めていた俺の耳に、切ない声が響いてきた。

伏は下半身半脱ぎ状態で、上半身も俺がまさぐっていたため、全身で乱れていた。

「いやっ！ これは、お前がっ！」

俺は慌てて離れる。

伏はそのまままた襲いかかってくると思ったが、苦笑しながら服を整えた。

「はあ、なんか今日は邪魔が入ったからもういいや。それよりもお兄ちゃん、あの真希ってやつには注意して。あいつ本物の呪術師みたいだから」

「呪術師……？ なんだそれ」

「まあ、人を呪って殺したり、怪我させたりする危険な奴だよ。偽物だと高をくくってたら、さっき一度呪い殺されたから」

伏は平然と言うが、いや、ちよつと待て。

真希が呪術師？

確かにいつも藁人形とか五寸釘とか持ってるけど！
しかも今殺されたって！？

え？ あいつ、伏が不死じゃなかったら、本気で殺してたってこと？

そんなやばい奴なの、あいつ？
いや、いきなり呪術師って言われてもピンとこないけどさ、まあ、

不老不死がいるくらいだから、そういうのもいるかもしれないけどさ！

よりにもよって真希が？

俺、あいつと結構付き合い長いぞ？

確かに変な奴だけど、そんな恐ろしい術持つてるような奴には見えないうぞ？

いや、確かに呪術師ってだけで人を嫌うのは違うと思うけど、現に伏を殺そうとしたしな。

「ま、注意してね、私は殺しても死なないからいいけど、お兄ちゃんはずぐに死ぬし、機能を停止させられることもあるから」

そう言いながら、伏は部屋から出て行った。

機能停止ってどの！？

まったく、不老不死に、呪術師か。

俺は何でこう、普通でない女の子ばかりに好かれるんだろうな。

翌日、何事もなかったかのような朝食は、まあ、何事もなかったので省略して、何事もなく伏と学校へ向かったわけだが。

通学中も何事もなく、とは行かなかった。

「……あれ……？ そんな……どうして……！」

物陰から、心底驚いた表情で俺たち、というか伏を見つめる声。

「……真希、おはよう」

まあ、真希の正体を知ってしまったわけだが、それだけで俺の方から態度を変えるのもどうかと思い、一応は普段通りに挨拶をしたみた。

「おはようございます、真希先輩」

伏も、満面の笑みを向ける。

真希はわけがわからず呆然としている。

まあ、呪い殺したはずの伏がぴんぴんしてるわけだから驚くだろ

うな。

「ど、どうして……？ 私は、絶対確実に……」

呆然というか狼狽しているようだ。

うるたえる真希はそれはそれで可愛いが、まあ、人をリアルに呪い殺すような奴だから、可愛いよりも厄介が上回る。

「先輩」

伏は笑顔のまま、一步前が出る。

真希は慌てて一步下がる。

「呪いは本人に倍返し、でしたっけ？」

伏は悪魔か何かかと思うくらいにすげえいい笑顔で、そんなことをのたまった。

真希はというと、伏の言葉に手足を極限まで震わせ、恐怖に泣きそうな顔をして、そのままその場に座り込んだ。

まあ、そのまま逃げてしまいたいんだろうけど、手足が言うことを利かないんだろう。

足元に見えるスカートからはブルーのパンツが見えているが、もはや隠そうともしない。

ま、ここは俺たちが去るのが紳土的ってもんだろう。

「伏、じゃ、行く」

俺は学校へ向かうようへと促そうとしたとき、伏は、ててて、と真希のもとへと小走りで向かう。

「……………」

ここからじゃ何言ってるか聞き取れないが、小声で何かを真希に言う。

真希の顔はすでに狼狽していたが、更に恐怖にゆがんだ。

ジヨオオオオオ……

なんだか、水音が聞こえ、真希の周りに水たまりが出来る。つて、漏らしてんじゃないか！

伏はなんて言っただよ！

「じゃ、行こうか、お兄ちゃん」

伏は生き生きとした笑顔で、俺の手を引っ張る。

俺は真希も気がかりだったが、俺に残られると真希も恥ずかしいだろうと思い、伏に引っ張られるがままに、学校へと向かった。

「お、おい、真希になんて言っただよ」

「秘密」

明るくそう言って、そのまま俺の手を引いたまま走り出したので、俺も走り出した。

真希はさすがに二日連続の欠席はまずいと思ったのか、遅刻気味で登校してきた。

まあ、そつとしておこうかとも思ったが、後味が悪いので話しかけることにした。

いつも暗めな奴だが、今日は九十度くらいにうつむき、下を見ていたのでまた、話かけづらい。

「あ、なあ、真希」

俺が声をかけると、真希はゆっくり上を向く。

「……………」

俺を見ているのか、虚を見ているのか分からないような視線を、一応俺に向けてくる。

「拓海……………」

目には泣き腫らした跡があり、目もまだ少し赤い。

だが、ヤミモードのそれじゃなかった。

ヤミモードでなけりやそれなりに話は通じるだろう。

「伏が何て言っただか知らないが、気にするな。あいつはちょっと特殊な人生を送ってきたから、世の中のことでよく知らないだけだから」

伏に何を言われたか知らない以上、俺はそんな曖昧なことしか言えないが、とにかく励ましてみようとした。

「拓海くんは、こんな私にも優しくしてくれるの……?」
いじらしく、そんなことを言う真希はとても可愛い。

「まあ、お前とは昨日今日の付き合いじゃないだろ? お前が悲しんでりゃ、励ましたいとも思っさ」

俺は真希の頭をぽん、と撫でるように叩いてやる。

真希は俺の触れた場所に手を乗せ、暖かそうに撫でる。

「……拓海くんの妹さんにひどいことをして、拓海くんの前でお漏らしたのに?」

恥ずかしそうな、泣き出しそうな表情で真希は核心を突く事を口にする。

さて、ここは難しい問題だぞ。

気にしないと言うと、これからガンガン伏を呪ってくるだろう。まあ、伏は死なないから殺しにかかれても問題はないが、封印とかなんとか、他にどんな術を持つてるか分からない上に、その攻撃対象が他に向かった時に恐ろしい。

かと言って、やめろと言うのもそれがどこに向かうか分からない。別に呪術師だから真希を嫌うって事はないし、それだけは伝えておきたい。

さて、何て言うのが一番いいか?

行為を否定しつつも、その立場は否定しない。

なかなか難しいな、これ。

「いや、まあ、あまり褒められた話じゃないと思うし、やめた方がいいと思うけどさ……」

そう切り出すと、真希の顔が曇り始める。

「べ、別にそれが駄目ってわけじゃないぞ? 少なくとも俺はそういう真希もいいと思ってる。そういうさ、人の出来ないことをやるって、まあ、格好いいじゃん」

慌てて取り繕った。

これで何とかバランスが取れたか?

「拓海くん……」

真希はさつきとは違い嬉しさの混じる驚きの表情で俺を見つめる。

「私のお漏らしが、そんなによかったの……？」

「そっちじゃねえよ！？」

俺は慌てて否定した。

「でも、さつき格好いいって……」

「それは呪じゅ」

俺は慌てて口閉じた。

俺が真希を呪術師と知ってるってことは黙っておいた方がいいかも知れない。

「その、伏にひどいことしたって言っただろ？ 何か知らないけど、そういうことはやめた方がいいけど、そういうのが全面的に駄目ってわけじゃなくて、少なくとも俺は興味があるっていうかさ」

とにかく、伏に危害を加えないことと、でも呪術師を否定してないことを呪術師を知らない体で言わなきゃならない。

「拓海くんは、ひどいことをされることに興味があるの？ Mなの？」

「ノオオオオオツ！」

どんどんドツボにはまっていく俺。

俺は真希に説明するのに更なる時間を要した。

「はあ……」

俺は思わずため息をつく。

何ていうか、今日は本当に疲れた。

「どうしたの、拓海くん？」

そしてそれは現在進行形だ。

「いや、ただ単に今日は疲れたっただけだ」

俺は返す言葉も適当に真希に返す。

「ふーん、でも昨日はきちんと寝かせてあげたじゃない？ どうして疲れるの？」

俺は伏と真希の三人で帰っている。

分かるだろうか、冷戦どころか開戦してる最中の二人を連れて帰る、当事者の俺。

伏もやたら刺激的な事ばかり言い、真希はヤミモードになりかけの状態だ。

なんだろう、このままじゃまずい。

このまま全面対決になったら、おそらく俺も巻き込まれる。しかも、ただじゃすまないレベルで巻き込まれる。

何とか話題を変えて、少なくとも今日の対決は避けないと。

「樋田　っ！　どこに行ったのよ、樋田あああっ！」

だが、話題を変えるまでもなく、話題が自ら飛び込んできた。周囲には俺たちのような下校中の生徒が多い中、似つかわしくないゴスロリの女の子が半泣きで叫んでいる。

見た目から判断して中学生くらいか？　ゴスロリは妙に似合っていて、生意気そうなその子を可愛く見せていた。

だが、とことん下校風景に似合わない、現実離れたような子だな。

その女の子は、不安げに辺りをきょろきょろと探しながらふらふらと歩き回っていた。

右に左に首を振るたびにツインテールが揺れる。

「迷子、か？」

俺はとりあえず伏と真希に確かめてみる。

いや、中学生だぞ？

中学生で迷子？　ってのがありえなかったので、確認を取りたかったんだが。

「まあ、状況を見る限りそうなんじゃないのかな？」

伏も判断に困る様子で答える。

ま、本人に聞いてみればいいか。

「どうしたんだ？　迷子か？」

俺は出来る限り優しい声でその子に話しかけてみる。
いきなり年上に話しかけられても怖がるかと思ったからだ。

「ち、違っわよっ！ 樋田が迷子なのよ！」

半泣きの顔を繕いながら、そう主張する女の子。

いや、どう見てもこの子の方が迷子に見えるんだけどさ。

だが、とにかく微妙な年頃の女の子だし、自尊心を傷つけないようにしないとな。

「そっか、それは大変だな。よかつたらその樋田ってやつを探してやろうか？」

「……ほんと？」

不安げに見上げる瞳が可愛い。

って、俺は中学生に何ときめてんだよ！

「ああ、だからさ、樋田って奴の特徴を教えてくれ」

俺は優しく微笑みながらそう言った。

女の子は、それで安心したのか、少し涙をこぼす。

「うん、あのね、樋田はいつも口では意地悪な事言うけど、本当はとっても優しいの」

完全に子供口調になった女の子。

もしかや中学生に見えるが小学生なのか？

「……いや、そんな内面的は話されても見つけられないんだが」

ともかく、優しいと言われても探せない。

俺がそう突っ込むと、女の子は不思議そうに俺を見上げて、はつと目を開く。

ん？ 俺が何かしたか？

「まさか所長にそんな風に思われているとは意外でした」

俺の背後から、聞きなれない声。

振り返ると、長めの髪の美形と言ってもいい優男が立っていた。誰だこいつ？

「樋田っ！」

女の子がそいつのところに駆け寄る。

ああ、こいつが樋田か。

「樋田！ どこに行ってたのよ！ 勝手に迷子にならないでよ！」

女の子が樋田に怒る。

樋田って奴はまあ、俺と同じくらいの歳に見えるし、どう考えてもこの子が迷子だったんだろう。

「迷子になったのは所長ですが、まあいいでしょう。僕は本当はとっても優しいので」

「なっ！ 何聞いてたのよ！」

女の子の顔が真っ赤になる。

「聞いていたというか、所長の泣き声のする方に来たら、勝手に言っただけです」

「泣いてないわよ！ 忘れなさいよ全部！」

「あいにく人より多少記憶力がありまして、中々難しいですね」

「そーれーでもー忘れなさああいつ！」

無茶を言う所長と呼ばれる女の子。

俺ですら呆れるくらいは無茶だが、言われた本人は平然とした態度で女の子を見返していた。

「……むっ！」

彼は急に深刻な表情になる。

「な、なによ？」

「料亭で季節の魚料理を食べると忘れるような気がします。ええ、おそらく忘れます」

「昼に食べたじゃないの！」

「何度言わせるんですか、今は鮎の季節にあらず！ ちゃんとした季節の魚でなければなりません」

よく分からないが、こいつら昼から鮎食ってたのか？

「本当？ じゃ、夜も魚を食べるわよ！」

「料亭ですよ、ここ、重要ですよ」

「分かってるわよ！」

怒鳴る少女。

「……この子、騙されてる……」

真希が呟くような声で言う。

俺も伏も同じ思いだったけど、割り込める雰囲気でもなかったの
で黙っていた。

「それでは皆さん、また機会がありましたらお会いしましょう」
樋田がにこやかに手を振る。

「あ、ああ……」

つられて俺も手を振った。

二人の姿が、角に消えていく。

「……なんだ、あれ？」

「うーん、お嬢様と執事？」

伏が腕を組んで首を傾げる。

「けど何か、所長、なんて言っていましたね？」

「じゃ、ショチヨウって名前の子だった？」

「そんな名前の女の子は、小六か中一で自殺するだろうな」

「普通に考えて、所長ってニツクネームなのかな？」

「そう考えるのが妥当か……」

二人の消えていった方角を眺めながら、その話題で喋っていたら、
いつの間にか家に着いていた。

妹が刺殺されたけど生き返り、変なロリータが絡んできた。

さて、また夜がやってきた。

これが毎晩続く限り、俺はいつか伏に童貞を奪われるだろう。
だが、向こうの技にも限りがある。

一度使った技はもう俺には通用しなくなる。

…… かも知れない。

攻防を毎日続ければ、いつか勝利の日が来るかもしれない。
かも、知れない。

まあ、伏の技が尽きるか、俺が塞ぎ切るか、というところか。
正直に言えば、そこまでの緊張感もない。

いや、初めての相手だし、それが誰とどういう形でって、結構大
事なのかもしれないが、まあ、その相手が伏だったとしても、嫌だ
という感情はどこにもない。

ただ、妹に無理やりってのが気に食わないだけの話だ。

最初がそうだったとして、その後が何か変わるって話なら別だが。
…… いや、待てよ？

もし、初めてを無理やり奪われた場合、その後の主導権をずっと
伏に握られてしまわないか？

一度握られたら生涯だ。

それどころか、俺の子供も孫も、延々主導権を握られかねない。

俺が初めてを無理やり奪われたことで、これの子孫が代々伏に主
導権を握られるかもしれない！

まずいな、これはまずいな。

一気に緊張してきた。

俺の貞操には、俺の子孫の命運がかかっている……！

って、あれ？ 俺、もう伏と結婚すること決めてるのか？

いや、そのつもりはない。

決定じゃない、候補の一人では確かにあるけど、伏に決めてるわ

けじゃない。

まあ、見た目可愛いし、性格も、時々怖い一面を見せるけど、悪くはない。

今はまだそれだけって事だ。

こういうのは積み重ねていくもんじゃないのか？

その先に恋愛があつて、結婚があつて。

だから、最初に子作りを持ってくる伏にはついて行けない。

それだけの話だったはずなんだがな。

いつの間にか俺もあいつに乗せられてたって事か。

ま、今一度冷静になろう。

そう思いながら、俺は布団に入った。

「ん？」

俺はすぐに違和感を感じた。

布団が妙に暖かい。

いや、それよりも伏のシャンプーの匂いがある。

これは、どういう……いや、考える時間はない、ここは危険だ。

俺はすぐさまベッドを飛び出そうとしたが、布団に忍んでいた魔物はそれを許してはくれなかった。

背後から俺の腰に巻きついてきて、ズボンとパンツをずり落とす。

まだだ！

こいつの目的は俺の股間。後ろから抱きつかれたからと言っても守り切れる！

そう思った瞬間だった。

伏の指が、強引に俺のあすほーにねじ込まれた。

「フオオオオオオオオッ！」

俺はその超感覚に悲鳴に近い声を上げた。

「やめっ！ めけっ！ そこっはっ！」

俺の言葉など全く無視してぐいぐいと指を押し込んでくる伏。

「ふふふ、かったわね、お兄ちゃん」

背後からは勝ち誇った伏の声。

「伏っ、これはどういうことだっ！ ふぁぁん！」

正直、あすほーの周りは思った以上に感じやすい。

一生知りたくはなかったが、それを知ってしまった俺は、この状態をあと三十分も続ければ、新しい扉を開いてしまいたいそうだな。

「ふふふ、お尻の穴に指を入れられると、どんな大男でも、力が出せなくなるのよ。昔格闘家のアントニオさんが、その技で生意気な新人を懲らしめたこともある有名な技よ」

そのアントニオさんは、あの有名なアントニオさんですかっ！

「私は生意気なお兄ちゃんを懲らしめればいいんだけどね」

伏は俺のあすほーの中の指をぐるぐると回す。

何か反論でもしたいが、声を出すと、何て言うか、情けない喘ぎ声を出してしまいそうなので黙っていた。

「さて、じゃあそろそろやってしまおうか」

伏は嬉しそうに俺の上に乗ろうとする。

「……あれ？」

だが、失敗する。

そりゃあ、俺の尻に指突っ込んだまま、俺の上に乗るのは中々難しい。

俺の股の間をくぐって俺に背を向けるようにして座らなければならぬんだろが、それでもかなり無理な体勢だ。

「くっ！ このっ！ お兄ちゃん、もつと足開いてっ！」

「無理っ、んふっっ！」

伏が動くので、俺はびくんびくんと感じてるんだが、だんだん女の子の気持ちがあわかって来てどうしようかと思う。

「もうっ！ お兄ちゃんの馬鹿っ！」

思い通りに行かなかったたのでイライラしたのか、伏はそう言っ指を一気に引き抜いた。

「いくううううううっ！」

俺はどこかに旅立った。

伏はそのまま出て行ったので、安心してそのまま意識を落とした。

威厳とかプライドとか言ってたけど、俺はもう十分それを踏みに
じられている気がした。

さて、また新しい朝が来た。
希望の朝だ。

喜びに開くものは何もないけど、またあの攻防が繰り広げられる
のかと思うと頭も痛い。

昨日はあの迷子の子に会ったおかげで、何事もなかったが、真希
のヤミも頂点に近かったからな。

呪術師として真希があれで引き下がるとも思えない。

昨日の夜も呪いはなかったし、今朝にも何らかの攻撃があっても
おかしくない。

昨日かなり伏を恐れてたから、もうあれで終わりならいいんだけ
どさ。

真希がそんなに諦めがいいなら、問題はないんだよ。

あいつはそんな奴じゃない。

絶対何らかの攻撃を仕掛けてくる。

そう思いながら、若干緊張気味に登校する。

本当は時間ずらして登校したかったんだが、伏がそれを許さなか
った。

ちなみに今日も腕を組んでの登校だ。

しかも伏は俺の腕に頬擦りするがごとく、くっついてる。

まあ、周囲が見て兄妹には見えないよな、これ。

よく言っただけ。しかも肉体関係を想像できるような密着度だ。

いや、伏に密着されるのが嬉しくないってわけじゃない。

服の上からでも分かる柔らかい体が俺に押し付けられ、甘い匂い
だとか、そういうのがあると、まあ、悪くはない。

だけど、俺にも世間体ってものがあるわけだ。

女の子と仲良く腕組んで登校なんて、人に見られたら、どんな噂が立つか分らない。

俺は周囲には真希と仲がよく、もう付き合っちゃえば？　みたいな感じで見られてるんだよ。

そこをさ、全く見知らぬ女の子と、真希ともやったことのないような親密ぶりで歩いてたら、そりゃあ悪い噂も立つ。

それを弁解できる唯一の事は、伏が妹だったこと。

だが、考えてもみよう。

妹とここまで親密に歩いてたらそれはそれで異常だ。

実際それで真希は嫉妬して呪い殺したんだからな。

「どうしたの、お兄ちゃん？」

そんな俺の心の葛藤など全く気にもせず伏が俺を見上げる。

あー……、まあ、一番悪いのはこれ突き放せない俺なんだよな、実際。

まあ、夜の攻防を考えると、このくらいどうって事ないと思ってしまっただよな。

「いや、何でもない」

まあ、少しくらいの噂なら気にしないし、このままで。

突然、俺と伏の前に、一人の女の子が現れた。

それが真希だと分かるのに、数秒はかかっただろうか。

俺と真希は結構仲がいいので、顔が分らないなんて事は普通ならありえない。

何故分らなかったのかと言えば、真希のヤミモードが異様だったからだ。

普段のヤミモードが健全で正常に思えるほど、これはヤバい。爆弾持って自爆する奴のような、そんな思いつめた顔。

心の底から怯えるような、そんな表情。

可愛いなんて思えない。

これは、美しい、とも言える。

そう、ぞっとするほど美しい顔だ。

「真……希……？」

震えて逃げ出したくなる足を抑えて、俺は声をかける。
すると、真希はにやり、と背筋が凍りそうな表情で笑う。

俺の血が凍ったんじゃないかと思うくらい寒い。

だが、それはほんの一瞬の事だった。

「……え？」

真希がゆらり、と動いたかと思うと、伏に体当たりをした。

「……え？」

体当たり、じゃない。

真希の手には、大きな包丁が握られていた。

それを伏のわき腹に刺したんだよ。

俺だけじゃなく、伏も一瞬啞然とする。

そりゃそうだ。

どんな要望になっても真希は真希だ。

真希が往来で人を包丁で刺すわけなんかない。

少なくとも、今この瞬間までそう思っていて、今でもそれを信じたくない。

「あんたが悪い！ 拓海くんに近づいて！ 私が長い間ちよつとずつ近づいて来た場所に割り込むから……！」

その声はもう、俺の知る真希の声じゃなかった。

悪魔が宿ったような声だ。

「あんたを殺して、私も死ぬ……！」

真希は包丁を抜こうとしたが、中々抜けなかったため、それを伏の腹の中に残し、来た方向とは逆に走り去って行った。

俺は呆然とそれを眺めているだけだった。

何が起こったのかを整理しなけりゃ優先順位も決められない。

真希が伏を刺した。

あいつは伏を殺して自分も死ぬと言い残して走り去った。

まずいな、伏は殺しても死なないが、真希は死のうと思ったら死ぬ。

「おい伏、大丈夫か？」

俺はとりあえず、包丁を刺されて地面に倒れた伏に声をかける。

「……いたい……もうちょっと、待って……」

苦痛に顔を歪めながら、いつもの元気な声じゃなく、小さな声で言う。

そうだ、こいつは不死身だが、痛みは感じるんだった。

それは治るまでの間だが、その間は激痛に耐えなければならぬ。俺に出来る事はないが、とりあえずてをぎゅっと握ってやり、背中をさすってやった。

いや、全く関係ないけど、生理痛に苦しんでる女の子にはそうしてやるといって言われた事があってさ、俺も気が動転してたからそうしたんだよ。

「……ありがとう、ちょっと痛くなくなった……」

伏がそう言ったのでほっとして続けた。

もうしばらく待つと、包丁は抜け、伏は元気に立ち上がった。

「ありがとう！」

そして、俺に抱きついてきた。

「ああいう時って本当に痛くて不安になるの。だから優しくしてくれるのが一番なんだよ！」

そうか、俺の生理痛介抱のやり方ってのは間違いでもなかったって事か。

「よし、じゃあ、真希を追うぞ！」

「どうして……？」

「あいつ、自殺するつもりだ！ 追いかけて止めないと！」

俺は真希の消えた方向に走ろうとする。

だが、伏が腕を絡めてきてそれを止める。

「ねえ、あいつは私を二回も殺したんだよ？ 二回とも、本当に痛かったし、苦しかったんだよ？ それでもお兄ちゃんはいいつの味方をするの？」

少し、いや、かなり怒り気味の伏。

まあ、確かにそうかもしれない。

真希は二回も伏を殺そうとした。

伏が死ななかったら、今、伏は死んでいるわけで。

死ななかったとしても、地獄のような痛みを味わってるわけで。

それを味わわせた、つまり伏の敵ともいえる真希が勝手に自分で死のうとしているのを、助けに行くと言えば、お前はどっちの味方なんだ、と言われても仕方がないかもしれない。

だが、俺にとっては伏も真希も大切な人間だ。

どうあれそれが変わることはないと思う。

「こういう例えはしたくはないけどさ……俺は例え目の前でお前が殺されてても、真希を追いかけてたと思う。それはお前が大切じゃないとか、そういうことじゃなくてさ、死んだお前よりも死のうとしている真希を優先するってだけの話だ」

「……………」

伏は涙をこらえるような目で俺を睨み、だが、何も言わなかった。分かってくれたわけじゃないだろう。

だが、これ以上伏に時間を取られるわけには行かない。

「悪い、伏っ！」

俺は伏を置いて真希の逃げた方へと走る。

こっちの方向には学校がある。

まさか、あの状態のまま学校へ行く事はないだろう。

他にあいつが行きそうな所。

あんな状態になったあいつが行きそうな所。

「あそこかつ！」

俺は地面を強く蹴り、より強いダッシュでそこに向かった。

そこは、学校の近くにある公園。

結構大きくて、林や池もある公園だが、この時間帯は通路として使っている奴以外、ほとんど人はいない。

その池のほとりに、真希は立っていた。

ナイフがなくなった以上、飛び降りるか溺死するかしかないと思

ったが、後者を選んだようだ。

「真希っ！」

俺は走りながら叫ぶ。

今にも飛び込もうとしていた真希が振り返る。

「来ないでっ！」

真希が叫ぶ、だが俺は、それを無視して走る。

俺の行動が想定外だったのか、あいつの動きが一瞬止まる。

その瞬間に俺は真希を捕まえる。

手をつかむとか、そんな状況じゃない。

暴れられたり、変な抵抗をされても困る。

俺は、真希をしっかりと抱きしめて動きを止める。

「……っ！」

俺のハグで肺を圧迫されたた真希が口から息を漏らす。

勢いで抱きしめたが、真希を抱きしめるのはこれが初めてだ。

伏よりも少しだけ肉付きがよく、柔らかな身体が、俺の腕の中で縮まり込む。

「早まった事すんなよ！ お前が死んだらどれだけの奴が悲しむと思っただよ！」

抵抗はしない、俺に捕らえられた時点で真希は死ぬのを諦めていた。

「私が死んだって、誰も悲しまない……伏ちゃんを殺した私なんて死ねばいいって、みんな思ってるからっ！」

真希の叫びは、ヤミのそれじゃなかった。

ヤミじゃないこいつは人を殺すことはないし、それをした人間は生きていてはいけないと思ってる。

全く難儀な奴だな。

「伏は死んでないし、たとえ死んでも、お前も死ねたのは違うだろ。それに、お前が死んでも誰も悲しまないって言ったが、少なくとも俺は悲しいぞ？」

真希はゆっくりと顔を上げ、俺を見る。

「……本当？」

それがどっちの意味なのか分からない。

伏が生きていた事か、真希が死んだら俺が悲しむってことか。

まあ、後者だろう。

殺そうとした奴よりも、自分が俺にどう思われてるかの方が大事
なはずだ。

「もちろんだ。お前とここ何年友達やつてると思ってるんだ」

「そうじゃなくって、伏ちゃんが生きてるって本当？」

ああ、そっちだったのかよ。

こいつもヤミでなければ伏の事ちゃんと思つてくれるのか。

と、ここまで思つて、さて、伏の事をどう説明しようかと迷った。

あいつは不老不死だから、などと言うわけにはいかない。

「えーっと……何ていうか……刺さってなかった？ うん、そう、
刺さってなかったんだよ！」

「……刺さってなかった……？」

真希が不思議そうに首を傾げる。

そりゃあそうだろう、刺した本人だ。奥まで肉を刺し込んだ感觸
はあつただろうしな。

「まあ、お前は確かに殺人未遂だただろうけど殺しちゃいないし危
害も加えてないって事だ」

「そ、そんなはずはない……だって、私は本当に刺したのに……」
「……錯覚じゃないか？」

苦しいと思うが、俺はそう言ってみた。

「錯……覚……？」

「ああ、お前、あの時まともな精神状態じゃなかっただろ？ だか
ら伏を刺すって妄想に囚われてて、それで刺したと思い込んだんじ
やないのか？」

俺がそう言つても、真希はまだ半信半疑だった。

まあ、それは仕方がないだろうな。ともかく、不老不死がばれな
きゃいいんだ。

「よく分からないけど……伏ちゃんに謝らないと……」

「……そうだな」

それは、俺も同じだ。

何せ、あいつから見れば、刺された自分を置いて刺した真希を選んだんだからな。

それは考えつくした上での優先順位の問題なんだが、そんな論理的な事を簡単に納得してくれる女の子は中々いないだろう。

「はあ……」

俺はため息を一つついた。

「どうしたの？ 私、まだ何かしてた？」

「いや、そうじゃない。俺も伏に謝らなきゃならないかなと思ってたら気が重くなってるな」

「拓海くんが？ どうして？」

ここまで言って誤魔化す必要がある事を何とか思い出した。

「いや……刺されてないって言っても、精神的に参ってたあいつを置いてお前を追いかけてきたからな……引き止められたし、怒ってたし」

そう思うとまたため息が出そうになるが、俺よりも遥かに重い謝罪が必要な真希の前にはそれ以上落ち込めないので、我慢した。

「そうなんだ……」

だが、その真希は少しだけ嬉しそうに微笑む。

何だろう、俺にはその微笑の意味が分からない。

「どうして嬉しそうなんだ？」

「え？ ううん、何でもない。ただ、拓海くんがそんな時にも私を追いかけて来てくれたことが嬉しいってだけ」

本当に嬉しそうな微笑つてのはこういうのを言うんだろうな。

まあ、そんな笑顔を見ただけでもこいつを助けた甲斐があったかな。

「ごめんなさい！ 許されないと思うけど、本当にごめんなさいっ

！」

真希が土下座しかねないくらいの勢いで頭を下げる。

「イインデスヨ、マキセンパイ。コウシテイキテルンデスカラ、ダイジヨウブデス」

棒読みを通り越して怨念のこもった声と、引きつった笑いで伏が答える。

俺にはそれが、真希にじゃなく俺に当てつけられているのは十分に分かる。

さつきから俺を睨みつけてるし、真希の見てないところで足を踏まれたり脛を蹴られたりした。

股間に拳を入れられそうになって、それは何とか避けた。

まあ、とにかく、俺に対してこの上なく怒ってるのは分かる。

この怒りを鎮めるには、もう子種を差し出すしかない気もするくらい怒ってる。

「ただ、もうこんな事はやめましょうね。このクサレ精子……お兄ちゃんに嫌われますよ？」

「……うん」

真希は少しだけ笑う。

「ま、悪気があるうとなかろうと、殺そうとしたのは悪いことだが、運良く生きてたんだから、もう今日の事はもういいけどさ、やったってことだけは忘れないように」

「真希先輩、あつちに犬がいますよ！」

伏は俺の言葉を、死ぬほどどうでもいい事で遮った。

「え？」

真希が向こうを見た瞬間、俺の顔面にハイキックが飛んできた。

いや、制服着てハイキックなんてするなよお前！

見えるよ、見えたよ！ お前チェック好きだな！

「いないよ……拓海くん、どうしたたの？」

「いや、チェックのコットンを見てたら急に顔面が痛くなったんだよ」

「????」

真希が首を傾げる。

「ま、そんなどうでもいい事より、そろそろ学校行きましょう！
もう大遅刻ですけど！」

伏は俺のわき腹に肘を思いっきり入れながら、笑顔で言う。

「……あ、そうだね」

真希もそれに従い歩き出す。

俺は、痛みで少しだけゆっくり歩いた。

その日の帰り道、昨日よりはましな下校になると思っていたが、
まあ、やっぱりどこか気まずい雰囲気の流れていた。

まあでも、伏もヤバいと思ったのか、そんなに挑発的でもなくな
ったし、真希もおとなしくなったしで今までに比べれば、マシでは
あるんだが。

そんな事を考えていた時、俺はまたあいつを見つけた。

「どうしたの、お兄ちゃん？」

「いや、あれ」

俺が指差す先には昨日の女の子がいた。

「あれはこの前に迷子だった子？」

真希が前方の女の子を見て言う。

「そうですね」

「ていうか、また迷子じゃないのか？ あれ」

彼女は遠目にも分かるくらいに不安げに辺りをきよろきよろして
いて、ふらふらと危なっかしく彷徨っていた。

「そうだね、またあの、何だっけ、樋田って人とはぐれたのかな」

ま、多分というか、間違いなくそうだろう。

俺たちはその子の方へと向かった。

「樋田あああっ！ ひだあああ！ うわーん！」

女の子は相変わらずのゴシックローリータ服を着ていたが、泣きながら首を振って樋田を探していた。

中学生と思われる女の子の、本気泣きの絶叫。

普通なら引いてしまう状況だ。

だが、妙に彼女には似合っていて、微笑ましさをすら感じた。

「おい、また会ったな」

俺は声をかけてみる。

「樋田？　じゃない、誰？」

彼女が無防備に首を傾けて俺を見上げる。

「昨日会っただろ、覚えてないか？」

「んー。あ、覚えてる！　樋田を連れてきた人！」

妙に期待がこもった目で少女に見られる俺。

「いや、あの時はあの樋田って奴がいつの間にか後ろにいただけで俺が連れてきたわけじゃないんだけどさ……」

期待されても困るので、とりあえず誤解を解いておいた。

「で、どうしたんだよ？　また迷子か？」

「ち、違うわよ！　樋田が迷子！」

泣きはらした目と、まだ少し鼻にかかった声で、女の子が堂々と嘘をつく。

「いや、どう見ても……」

「ひーだーがーまーいーごーー！」

駄々をこねるような口調の彼女。

「まあ、どっちでもいいけど、よくはぐれるみたいだね。どこかで待ち合わせとかしてないの？」

「してない……」

女の子が悲しそうにうつむく。

「そっかー、じゃあ……ん？　なんだこのタグ」

俺は、少女が来ているローリータ服の背の部分に、タグがぶら下がっているのに気づいた。

「これは、迷子札だね」

伏がそれを手に取ってみる。

「迷子札！ 樋田あつ！」

女の子が先程まで泣きながら探していた相手に怒りだす。

「まあ、落ち着けて、何々……『迷子のこの子を見かけたら、携帯で連絡しなさい』と言ってあげてください』って、携帯持つてんのかよ」

「うん、持つてる」

少女はポケットから可愛い熊のストラップがついた携帯を取り出す。

「だったら、それで連絡すればいいんじゃないか？」

「あ」

その手があつたか、という表情の少女。

そもそも、そんな事をいちいち迷子札に書かなくても、向こうから連絡すればいいんじゃないか？

彼女は携帯を開く。

「あ、沢山着信がある！」

どうもその樋田という相手から、何度も携帯に連絡が来ていたようだ。

ああ、だからこの子からかけさせる事が必要なのか。

「もしもし、樋田？ 今どこにいるのよ！ そんな地名言われても分からないわよ！ 屁理屈言うなっ！」

死ぬほど高圧的口調で、ひだと思われる相手と喋ってる女の子。だがそれを平然と交わす相手の様子もまた想像出来た。

「私？ 私はここににいるわよ！ 分からないってどういうことよ！ 近くに電柱があるわ。……誰が馬鹿なのよ！ 知らないわよ、日本の電柱の数なんて！」

相手はやっぱりあの樋田だろうなあ、こんなこと言い返せるのはあいつしかいなさそうだ。

「あー、映画館の角のところって言えばいいよ」

俺は見るに見かねて助言した

「映画館の角！」

そう叫ぶと、彼女は電話を切った。

「全く、樋田は！」

悪態をつく少女。

「あははは……」

あの伏が苦笑いしていた。

そして、ここにいる子の女の子以外の全員が、樋田と奴に心から同情していた。

「樋田はね、屁理屈ばかり言うのよ。いつも反抗的で、本当に腹が立つわ！」

当の本人は、そんな俺らの思いなんか気づきもせず悪態をつく。
「あ、ああ……。ところで、あんたと樋田って奴は、どういう関係なんだ？」

昨日から疑問だったんだが、歳も下のこの子が、俺らと同じくらいの歳と思われる樋田って奴を頭ごなしに怒鳴れるってのは、普通の関係じゃない。

「樋田は私の部下よ。私が雇用主なのに！」

「……そうか」

とりあえずそう返事してみたものの、お嬢様と執事って、雇用主と部下って関係じゃないよな。

といっても、こんな子が事業なんかやってると思えないし、やっぱりお嬢様と執事しか考えようがないんだよな。

まあ。この子の態度や依存度から考えても部下っていうよりも、執事って感じた。

彼女の態度や樋田への依存度からも、そう考えるのが適切だ。

「まったく。いつまでかかってんのよ、樋田は！ 遅すぎるわよ！」

「いや、まだ電話切って一分も経ってないよな」

さすがに俺は樋田を弁護した。

どこにいるのかは分からないが、多分一分で来れるような場所じゃないだろう。

女の子はその後悪態をついたりぶつぶつ言ったりして樋田を待っていた。

俺たちもほっとけばいいんだが、ここまで関わってしまった以上、樋田が来るまで付き合っていた。

「ここにいましたか。探しましたよ、全く」

ようやく彼が現れたのは、十分の後だった。

「遅い！ 何してたのよ？」

「迷子の所長を捜していました」

何の迷いもなくオブラートにも包まず、平然と言つてのける樋田。
「電話したでしょうがっ！ いつまでかかってんのよ！」

「映画館の角と言われて、そう簡単に分かるわけないでしょう。道を聞いてやっとここに来れたのですよ？」

俺は樋田の弁護くらいしてやるうかと思つたが、その必要は全くなく、樋田は完璧なる自己弁護を繰り出した。

「道くらい覚えていきなさいよ！」

「旅先の、行く予定のない場所の地理を、わざわざ迷子になる所長のために覚える必要があるのですか？」

「まったく、ああ言えばこう！」

怒る彼女に、樋田はやれやれ、と手を上げ、拓海らに振り返る。

「おや、またあなた達でしたか。今回もうちの所長がお世話になりました」

「お世話になってないわよ！ お世話してたのよ！」

いや、世話になつた覚えは全くないんだが。

確かに世話つて言つても携帯で連絡しろといっただけで、礼を言われるほどでもないんだが、世話になつた覚えはかけらもない。

「所長、嘘をつかないください。所長がどれだけ世話になつたかはともかく、あなたが世話をしたということは絶対にないはずですよ」

女の子を誰よりも知っている樋田は、的確に反論する。

そしてそれはずばり当たっていた。

「所長、一応外の人間にお世話になつたのなら素直に感謝くらいし

てはどうですか」

樋田の口調はいつもと全く変わらないので、それが本気の説教なのかからかいなのかさっぱり分からない。

「……ありがとう」

だが、女の子は樋田の言うことを聞き、誠意の全くない、あさつての方向を向いて頬を膨らませてだが、礼らしき事を言った。

「すみませんね、本当はいい子なんですよ」

「樋田！ あんた上司の事を何だと思ってるのよ！」
ぐい、と女の子の頭を押さえて頭を下げさせる樋田と、それに怒る女の子。

彼女が頭を持ち上げようとするが、樋田の力にはかなわない。

「……ところで、あなたたちは何者なんですか？ 所長って何かニクネームなんですか？」

二人の関係を不思議に思っていた三人を代表して、伏が聞いてみる。

「申し遅れました、私は不老不死研究所所員の樋田信人と申します」

「不老……不死……？」

その名前に不穏なものを感じた俺は、怪訝な顔をする。
そして、後ろにいる伏を少しかばうように手を広げる。

「あ、不老不死と言っても研究しているのはアンチエイジングです。ただ、くだらない所長の趣味で、こうして全国各地の不老不死伝説を見て回っているのです。こっちはその所長の水上結衣です」

「何がくだらない趣味なのよ！」

「所長、その『くだらない』は趣味にかかるのではなく、所長にかかるのですよ」

「あ、じゃあい……ってよくないっ、誰がくだらないのよ！」
結衣と紹介された女の子は、よくまあそんなに元気が続くなあ、と思うほど怒鳴っていた。

樋田はそれを平然と受け流す。

で、俺の疑問が完全に晴れたわけでもなかった。

いや、さっきの自己紹介でこいつらが何者かは分かったんだが、所長と言ってる結衣って子はどう見ても中学生だ。

いや、別に中学生が会社をやってちゃ駄目なわけでもないが、こんなゴシツクロリータがよく似合い、やたらかんしゃくを持つてるこの子が、先頭に立って研究や事業をやっているとは到底思えない。多分他の二人も同じ事を思ってることだろう。

まあ、多少年上だが、樋田もそうだ。

俺らと大して歳が変わらないであろうこいつが、研究所で何かを研究してると思えない。

もしや研究所ってのはどこかの何とか研究会ってクラブみたいなもので、その所属なのか？

まあ、少なくとも研究所ってのは眉唾だろう。

「おや、疑わしい顔ですね。まあいたし方ないところですが、所長はこう見えてアメリカの大学のドクターコースを卒業していますし、私もマスターを卒業しています」

「へえ……」

俺はちよつと二人を見直した。

全くそうは見えないが、この子は天才なんだろう。

まあ、おそらく色々なものを犠牲にして勉強だけやってたんだろ
うな。

「そして、何より衝撃的なのは所長、こう見えて十七歳です」

「ええっ!？」

「なんだって!？」

「本当に!？」

「なんでそつちに驚くのよ!」

これは衝撃以外の何ものでもない。

いや天才少女ってのも確かに意外なんだけどさ、この子が俺たちと同じ歳ってのが信じられない。

それはもう衝撃的だ。

見た目だけじゃなく、精神的な部分で俺たちと同じには思えない。
「アンチエイジングの成果を自分で試していたら、成長が遅れたそうです。馬鹿でしょう?」

「樋田!」

「ま、頭はいいですし研究成果も凄いのですが一般的な常識を知らない事が多くて精神的な成長も遅いようなので、この格好はちょうどいいんですけどね」

「うがあああつ!」

結衣が心の底からの怒りを樋田にぶつけるが、樋田は結衣の頭を押して一切の攻撃を封じていた。

「ま、僕たちの紹介はそんなところです」

片手で、結衣を押しつつ、もう一方の手を広げて言う樋田。
そんなこいつらに、俺は少しだけほっとする。

二人の研究所が不老不死研究所ということで警戒したが実際はアンチエイジングの研究所のようだ。

ま、歴史研究ならいくらでもやればいいし、そこから伏にたどり着くって事はまずないだろう。

それなら危険はない。

少なくとも伏に危害が及ぶって事はないだろう。

「もうっ! 樋田はっ!」

結衣は樋田への攻撃を諦め、彼から離れる。

「あんたたちはどうなのよ! 人にだけ名乗らせて!」

その怒りは樋田よりも簡単そうな俺たちに向けられた。

「私は、坂下真希。よろしく」

珍しく、真希が最初に自己紹介をした。

「俺は風楼拓海。こいつは風楼伏で妹だ。よろしくな」

俺はそれに続き、

「うん、よろしく……風楼?」

結衣がはっと、顔を上げる。

「どうかしたか?」

その態度があまりにもおかしかったので、聞いてみた。

「単に苗字が珍しかったんでしょ。こういう不審な行動を取る子なんですよ。ほっといてあげて下さい」

「誰が不審者よ！」

「所長がです」

「答えなくてもいいっ！」

結衣が再び怒り出す。

「自分で聞いておいて何ですかそれは」

「そういう意味で言ったんじゃないわよ！」

「じゃあ、どういう意味なんですか？」

「えーっと、この『誰が』は、疑問じゃなくてえっと……って、なんでこんな事解説しなきゃならないのよ！」

「はいはい、分かりました、分かりました。私は部下だから理不尽な上司にも従いますよ」

樋田はやれやれ、といった態度で結衣に背を向ける。

「いつも自由なくせに！」

「所長はいつもそんなに、疲れませんか？」

「疲れるわよ！」

「疲れると分かってて何故怒鳴るのですか？ あ、何かのスポーツみたいなものですか？」

「違うわよ！……はあ、本当に疲れた……」

結衣はぐったりと肩を落とす。

そんな彼女の様子を一瞬だけだが満足そうに見たのを俺は見逃さなかった。

「所長もお疲れですから、一旦休憩しますか。それでは皆さん、また運があればお会いしましょう」

樋田は、そう言うたとすたと去って行った。

「ま、待ちなさいよ……！」

その後を結衣がふらふらと追いかけていった。
俺たちはしばらくそれを呆然と見つめていた。

嵐のような二人の会話に、何も反応出来なかったんだよな。

「 帰るか」

俺がそう言ったのは、一分ほど後の事だった。

妹の部屋でおな兄ちゃんになった。

幕間 研究者の発見

「ちよつと、何勝手に休憩とか決めてるのよ！ あと、休むならホツトココアのあるところがいい！」

「何休憩取るつもりなんですか、さつさと行きますよ」

樋田が結衣の手首をぐい、と引っ張る。

「え？ え？ さつき休むって……」

「あれは嘘です」

「ココア飲みたい！」

「我慢してください」

結衣の駄々に、樋田は平然と答える。

「なんでよ！」

「さつきの兄妹を追うからですよ」

樋田が、今来た道をそつと戻る。

「あ、ああ、そうよ！ なんであそこで引いたのよ。色々聞けばよかつたじゃないのよ」

「そうですね、滅びたはずの風楼神社の風楼家。殺されなかつた末席の一族とか、明治に入って平民にも苗字が許されるようになったときに勝手につけたなら、親切に教えてくれるかもしれませんね」

樋田は少しだけ目を細める

「……もし、生き神を匿っていた一族の末裔で、今も匿っているのなら、風楼家という言葉に反応するだけで警戒するわよね」

結衣が腕を組んで考える。

「そうです。だから失礼を承知で所長にあんな事を言つて誤魔化したのです」

「そつだったの。ごめん、樋田は本気で言つてるのかと思つてた」

「ええ、この機に乗じて」

「うがあああつ！」

結衣の攻撃を先ほどと同様に、頭を押して交わす樋田。

「まあ、その前に不老不死研究所の名前を出したのはまずかったですね」

「それは樋田が出した！ 樋田のせい！ 樋田が悪いっ！」

結衣はここぞとばかりに責め立てた。

「さあ、早く行かないと見失いますよ」

樋田はあっさりそれを無視してさっさと来た道を戻っていった。

結衣も樋田の背中をぽかぽかと叩きながら、後を追った。

「ふむ、坂上という方とは別れたようですね」

先ほどの場所から、角を四つ過ぎた辺りで、真希と別れた。

「丁度いいわね、どこかに遊びに寄られたら面倒だったし」

二人は少し離れた後ろから、こそこそと後をつけた。

「所長、着替えてください。ゴスロリは尾行には目立ち過ぎます」

樋田はちらりと結衣を振り返って言う。

「無理に決まってるでしょ。それに持ってきた服もみんな似たようなものばかりよ」

「パジャマがあつたじゃないですか」

「余計に目立つわっ！」

「おや、寄り道はするようですね」

「急に話を変えるなっ！ って、ここはスーパー？」

拓海と伏は、帰り道にある大きめのスーパーに入っていく。

「ほら、所長の服ではスーパーは目立つじゃないですか」

「へ、平気よ！ ほら、行くわよ！」

結衣は樋田の言葉を聞かず、スーパーに走って行った。

樋田はやれやれ、と後を追った。

「あれ、結衣、だっけ？ 何してんだよ、こんな所で？」

角でぴよこぴよこ揺れるツインテールに呼びかけてみた。

俺は真希と別れた後、伏が夕食の材料を買いたいと言ったのでスーパーに寄った。

そうしたら、さつき別れたばかりの結衣がそこにいた。

いや、二回会って気まずいのか隠れてたんだが、服装が目立つからすぐに分かった。

この子、どこかに休憩しに行くって言わなかったっけ。

「休憩に行ったんじゃないかったのか？」

「え？ えっと、その……」

結衣は妙にそわそわして、言葉に詰まった。

「あの……ここが喫茶店かなあって思ったから」

「ここが？ どう見てもスーパーにしか見えないと思うけどさ……」

ここは極めてローカルなスーパーだ。

総合商業施設みたいに喫茶店が入っているわけでもない、夕方特

売が売りの一般的なスーパーだ。

そんなものは外観で分かる。

「で、でも、ココアとか売ってるでしょ？」

「そりゃ、売ってると思うけど」

「ほら！ ほら！」

結衣は妙に嬉しそうに言う。

何だこいつ。

あー、この表情は何かを隠しててそれを隠し通せた事に安堵する顔だ。

よく見るとあたりに樋田がない。

そうか、速攻でまた迷子になったのかよ。

「で、樋田って奴は？」

俺は一応確認のために聞いてみた。

「さっきまでいたけど、どこか行っちゃった……」

結衣が不安げに辺りをきよろきよろする。

やっぱりかよ。

「お前、迷子になるの早すぎるぞ？」

「違うわよっ！」

「もう少し周囲を見回してだな、自分と一緒にいる人がついて来ているか確認して」

「違う！ 今度は本当に違うのっ！ 樋田が勝手にいなくなったのよ！」

結衣は必死に説明するが、さすがに「樋田が迷子」説はもう信じられない。

「前の時も樋田が迷子って言ってたよな」

「それに今度は、などと、これまでの迷子を認めましたね、所長」
俺の背後からの声。

相對している結衣の一瞬の喜びと、直後のほっとした表情から、振り返らなくても誰なのか分かった。

「樋田！ どこに行ってたのよ！」

結衣は半泣きの状態で樋田をばかばかと叩く。

「一瞬で迷子になった所長を探していました。まさかスーパーにいるとは思わなかったのですが」

「だよな」

俺は心からこの子の面倒を見ている樋田に同情した。

「我々は確かにこの地に不慣れですから、休憩場所を探すのも一苦労ですが、さすがにスーパーに来るとは思いません」

「ち、違うのよ！ あの、そうじゃなくて！ その……色々あるのよ！」

もういいわけのしようがないのか歯切れの悪い事を言い出す結衣。

「ま、あえて聞かないことにしましょう。何もない事がばれて所長が恥をかきますからね」

「違うの！ 本当にあるの！ でももう言わないっ！」

「はいはい、分かりました、じゃ、そろそろ行きましょうか」

樋田が結衣の手を引く。

手玉に取るってこういうことだろうか。

「ではまた、機会がありましたら」

「あの、よかつたら」

樋田と結衣が去ろうとした時、それまで黙っていた伏が口を開く。
「うちで休憩して行きますか？ 何もないけど、お茶くらいなら出せると思いますから」

伏が突然そんな事を言い出したので、俺は驚いた。

こいつはもつと自分の事しか考えてないと思ってたからな。

まあ、こいつら面白そうだし、ここで別れてしまうのもなんだし、伏が誘う気持ちも分からなくもない。

「ココアある？ ココアあるなら」

「所長は自重してください」

「ココア飲みたい！」

「では、ここで買って行って、お湯をいただきますしょう。よろしいですか？」

「はい、構いませんよ」

伏が答える。

結衣もそれに納得したようで、このうるさい二人組はうちに来る事になった。

幕間 研究者の陰謀

「うまく行きましたね」

二人の買い物を待っている時、樋田が言う。

「うん、ココアも売ってたし」

「そうじゃないですよ、風楼家へ堂々と訪問出来るって事ですよ」

「あ、そっか！」

「あなたは僕より頭がいいと思っていましたが」

樋田は心の底から馬鹿にした目をする。

「わ、分かってたわよ、だからあえて見つかったのよ！」

「まあ、そんな嘘はともかく、ここからは注意ですよ。いつものうつかりが出ないよう、慎重に発言してください」

「いつもうつかりしてないから問題ないわね」

「その根拠のない自信は尊敬に値します」

樋田が先ほどと同じように心底馬鹿にした目で結衣を見た。

「……怒りたいところだけど、そろそろ本気で行くわよ」

「いつも本気の人は何を言ってるんですか」

「とにかく！ 私たちはアンチエイジングの研究を主としている研究員。だけれども、アンチエイジングの究極である不老不死の史実についても趣味をかねて調査しているって事でいいわね」

「それ、さっき僕が言いましたよね」

「どっちが言ったとかどうでもいいの！ それで少しでも手がかりをたどるのよ！」

結衣の意気込みと、いつもどおりの樋田。

「ま、私の役割は所長がドジった時のフォローでいいですね」

「じゃ、いらないわね」

「所長、あなたの研究は確かに凄いですが、それ以外の常識を含めた能力は並以下だと、そろそろ気づいてください」

「一生気づかない！ なぜならそうじゃないから！」

「まあいいです。そんなに簡単に理解してもらえないなら、今頃はもつと大人でしたでしょうから。おっと、戻ってきましたよ」

結衣は何かを言い返したかったが、拓海と伏が戻ってきて、会話を聞かれるのを避けるために黙る。

二人は大きめのエコバッグを提げて、こちらに手を振った。

「荷物、持ちましようか、所長が」

「なんで私なのよ！」

「所長が重い荷物を持ってふらふらと苦しんでいる姿を見て、私が溜飲を下げるからです」

「そんな目的のために！」

「あ、いえ、大丈夫です」

申し出とも言えない樋田の言葉を、伏はにこやかに断る。

「じゃ、行くか？」

拓海が出口を指差す。

それに伏が続き、二人が続く。

「というわけですね、アンチエイジングの研究とは全く関係ありませんが、所長のわがままで不老不死の調査という名目の旅行をしているのです」

俺んちのリビングで熱弁をふるうのは樋田。

それを終えて一息ついて座った。

母さんが買い物に行つてて不在らしい。

てか、さっき伏と買い物に行つたんだが。

もしかしてそういう連絡一切取り合つてないのか、この二人？

かつては恋敵だったらしいけど、少なくとも今は表面上は仲がいいと思つてたんだがな。

で、話を戻すと、樋田の隣に座つてるのは結衣。

ココアが目の前にあり、半分くらい飲まれている。

大好物であるうココアが飲めたはずなのに、嬉しそうな表情じゃない。

どっちかというと、むすつとした表情だな。

そんな表情からしても、この子が俺と同じ歳だつて事が信じがたい。

で、この子がなんでそんな表情をしてるのかつて言えば、樋田の説明の端々に、この子を小馬鹿にする表現が盛り込まれていたからだ。

まあ、そもそも最初はこの子が説明していたんだが、言ってることがよく分からなかったため、樋田に交代したわけだ。

「所長は研究以外残念な子なので、代わりに僕が話しましょう」

出だしから結衣を馬鹿にする表現から入り、説明の間中いたるところに彼女を馬鹿にする表現が入っていた。

少しはこの子の性格がわかっていている俺や伏は、この子が怒らないことの方が不思議だった。

しかし、そのむっすーんとした表情はこの子に合ってたとても可愛いと思う。

そう思っただけで微笑ましい表情を見ると、隣で親父も同じ表情をしていた。

何という駄目な親子だ俺ら。

そして、俺の隣で立ってる伏の方から妙な殺気が漂ってくる。

あ、これは、来るな。

何らかの攻撃が来る前兆の殺気だこれ。

「あ、足が滑った」

来たっ！

おそらく俺に何らかの攻撃をするつもりなのだろう、この角度からなら、多分脳天に肘だ。

「させるかっ！」

俺は上を見もせずに、脳天に手をかざし、伏の攻撃を待つ。

むにゅーん

あれ？

伏の拳は妙に柔らかいな。

俺のつかんだその拳は、弾力性に優れていて、ずっと触っていたものだっただけ。

いや？

これ拳じゃないか？

だって、拳は鼓動を打たないし、そもそも伏の拳は目の前に垂れ下がってるじゃないか。

向かいでは、さっきまで怒っていた結衣が呆然と俺を見ている。

「ん……んっ……！」

悩ましい伏の声。

ああ、もうお分かりだと思うけど、俺がつかんでいたのは、伏の乳の房だ。

まあ、伏のそれは可愛いもんだけど、胸を下に向けるとそれなりにあるんだよ、これがさ。

で、整理してみよう。

伏が狙ったのは、脳天じゃなく、おそらく股間。

若い……とは言えないが、見た目が可愛い女の子が、隙あらばそこを狙うってのはどうかと思うから、後で説教だが、そこを狙う際、さっと構えた俺の手が伏の胸をつかんだってわけだ。

普通に女の子にやったら顔面の中心を龍頭拳で殴られても仕方がないけど、伏には俺の股間をつかもうとしたっていう負い目もあるし、そもそも俺に欲情してほしい派だから、おそらくお咎めはなしだ。

「お兄ちゃん……やっぱり私なんだね……？」

「聞きたくはないけど、何の話だよ？」

「そのロリコン狙いの計算高い女……じゃなかった、ちょっと小さい女の子より、私なんだよね？」

断言するけど、計算高い、狙ってるのはお前の方だ。

「誰がロリコン狙いよっ！」

「そうですね、所長は全身全霊で天然です。ゴスロリしか着ないのは、ふわふわしているので、思わず手に取ってしまったのです」

「私は猫かつ！」

「しかしここには何も資料がないですね。他のところは本当にちょっとした伝説なのに、どこに行っても看板があつて土産もあつて、資料も比較的簡単に調べられるのに、ここにはそのようなものがほとんどありません。それどころか、住民の方でも知らないほうが多いと思われれますね」

「話の変換が急すぎてついて行けない！ この怒りのぶつけ場所を
用意してっ！」

結衣がばんばんとテーブルを叩く。

まあ、俺だつてついて行けなかったしな。

「とりあえず、所長の足なんてどうですか？」

「じゃあ遠慮なく……」

結衣は思いつき振りかぶって、自分の膝を叩く。

ばしん、と大きな音がした。

「痛いっ！ 樋田っ、ここは痛いっ！」

「あなたは馬鹿ですか」

「天才っ！」

この一連のやり取りを俺は呆然と見つめていたが、俺の手はずつ
と伏の胸を揉んだままだった。

「伏、そろそろ離してもいいか？」

伏が俺の手の上に自分の手を重ね、揉ませているからだ。

「もう少し…… あ、ブラ取るね」

「ノーブラトリ！」

俺は思いつき手を引いて、伏の胸から逃れた。

「ここはそういう資料は大切に取り扱い扱われていないんだよ」

このやり取りが何一つなかったかのように、親父が話し始める。

「ほう、そうなんですか」

同じように何事もなかったかのように、いや、ばんばん彼の足を
叩いている結衣の手を止めつつ返す樋田。

「明治維新の際、ずっと幕府側についていたせいで、城も焼かれて
今はないし、資料などの入った蔵も燃やされたそうで、そんな資料
は残ってないんだ。そうでなくとも、そんな資料があつたかどうか
も疑わしいみたいだけどね」

「そうなのですか。こんなに遠くまで来たのに、無駄足だったよう
ですね、所長」

樋田は自分が両手を捕まえている結衣に言う。

結衣はじたばたそれから逃れようとしながら、わめくように言い返す。

「無駄なんかじゃないわよ！ 『なにもない』って調査も立派な資料になるのよ！」

最後には体当たりをするが、今度は樋田が肩に手をまわしてそれを止める。

何だかんだこの二人、仲いいよな。

「まだ調べるつもりなのですか？ 他に何か調べることもなんてあるんですか？」

樋田が呆れた様子で聞く。

「何かあるでしょ！ こういう調査は地道なのが大事なのよ！」
妙に熱く語る結衣。

結衣は十七歳の天才少女ではあるが、見た目はゴシックロリータの中学生。

そんな彼女の熱意ある言葉は、俺の親父のようなロリコン属性も持ち合わせている人間にはたまらない事だろう。

「ふむ、そこまでの熱意があるなら、いい事を教えようか」

親父は気をよくして口を開く。

なんだよ、まさか伏の存在を教えるつもりか？

「え？ 何か知っているんですか？」

「そうじゃない！」

ばん、と机を叩いて親父が怒る。

「え？ え？」

怒られて戸惑う結衣。

そりゃそうだろう、俺だってなんで親父が怒ったのか分からない。
「もっとこう、『知ってるんならさっさと教えなさいよ！』って言わないと！」

親父の顔は真剣だ。

まあ、これが俺の知ってる親父らしい親父だけどさ。

家族ならまだしも、人様にそれを押し付けんなよ。

「……『知ってるんならさつさと教えなさいよ』」

結衣も圧倒されながら、素直に言う。

「分かった分かった、今教えるから」

それに親父は満足したようで手のひらを振りながらそう言う。

死ねばいいのに。

「この町に不老不死伝説があるのは事実だ。ただ、それは人間ではなく、神という存在だったようだ。その神が我々の祖先が代々神主を務めていた風楼神社の神だったそう。実際、若い女性の姿をした神の姿を、村人たちも見ていたそう」

「うんうん」

「だが、実際にその噂を聞きつけた奴らが神社を襲撃し、神社は壊滅した。その際に、その神と言われていた女性も殺されたようだ。村人の中には見ていた人もいたらしい。その事実は翌日には村中の知る事となり、不老不死の神はいなかったのだ、という事になって村人たちはその話をしなくなり、領主もそれを聞いて怒り、風楼神社の再興もせず、風楼神社に関する書物も全て焼き払ったということらしい」

「……ふうん」

「ま、これがこの地域に伝わる不老不死伝説の実際だ。がっかりしたかい？」

「別に、どこの不老不死伝説も大体そんなものだったから」

結衣はそう言って、ぐい、とココアを飲む。

多少の強がりも感じるが、どっちかというと諦めが強い気もする。

「じゃあ、休憩もしたからもう行く。樋田！」

「そうですか、それではいいお話とお茶ありがとうございました」

樋田が頭を下げる。

「そうか、またいつでも来なさい」

「ああ、いつでも来いよ」

「お心遣い、ありがとうございます。では失礼します」

そう言って樋田は、既に部屋を出ようとしている結衣に続いて帰

って行った。

「ふむ。いい、ツインテールだ……」

さて、これから俺は親父と伏の説教タイムに入るか。

幕間 研究者の失望と挑戦

「残念でしたね、所長」

早足で歩く結衣の後を、悠々と歩いて続く樋田。

結衣の後について歩いているだけだが、そっち側にホテルがないことをいつ言おうかと考えていた。

「こんな事は今までもいくらでもあるわよ。でも、ちよつとさっきのおじさんの話、一個だけおかしいところがあつたのよね」

「そりゃあ、本人が見てきた話というわけでもなし、矛盾くらいあるでしょう」

「そうじゃなくて、さっきその時代に領主が資料を燃やしたからもうないって言つたわよね？ でもその前には明治維新の時に焼かれたって言つてたのよ。結局どっちなのよ」

結衣は振り返り、樋田にびし、と指を突き立てた。

結衣の突然の行動に、止まりきれなかった樋田は胸にその指があったり、結衣は突き指をしかける。

「それこそ、本人が見たわけじゃないですから、どちらで焼かれたかなんて分からないってことじゃないんですか？ 現実に資料はありませんし」

「そうかもしれないけど、そんな矛盾を人に説明するものかな？」

「そりゃあ、人に指摘されない限り、矛盾にすら気づかない事なんていくらでもあるでしょう、特に所長なんかは」

「私はないっ！ とにかく、もう少し調べるわよ！ 風楼家を中心に！」

結衣が再度びしつと指を突き立てる。

今度はひらりとかわす、結衣が。

「あの人たちに迷惑をかけないようにしてくださいね。悪い人誰もいませんでしたし」

「分かってるわよ、あの拓海と伏の兄妹も、おじさんも、親切だったし…… そういえば、なんであのおじさん、こんな平日の昼に家にいたのかしらね？」

結衣が首を傾げて腕を組む。

「たまたま休みだったとか、夜勤とかじゃないんですかね？ もしくは仕事がないとか」

「まあ、そんなところよね。ま、今日は一旦帰りましょ」

「休憩を最後に終わるんですか。サラリーマンなら給料泥棒と呼ばれてますね」

「払う側！」

怒鳴る結衣とそれをかわす樋田の影が、夕暮れの街へと消えていった。

夜が来た。

また、夜が来た。

俺は夕方から親父と伏を延々説教し、伏に至っては、腹黒さや夜の襲撃に至るまで説教したのだが、おそらくそんなことは一切無視して今日も来るだろう。

そろそろ俺に安らかな夜が来てほしいものだが、その願いはいつかかなえられるんだろうか。

そんなことを考えつつ、明かりを消す。

しばらくそのまま、待機してみた。

気配はない、少なくともこの部屋にはまだ来ていないか。

俺は安心してベッドに向かう。

その時、廊下から走ってくる物音がする。

伏か、伏しかないかつ！

走ってくるとは一体どんなつもりだよっ！

俺は飛び起きて伏がどう来てもいいように立って身構える。

「お兄ちゃんっ！」

「帰れ……どうした伏？」

一言目で追い返そうと思ったが、伏の表情に真剣さ、というか恐怖が読み取れたので、俺は真面目に聞いた。

「部屋に何かいるっ！」

俺に抱きついてくる伏。

その腕が震えている。

不老不死のこいつが恐怖するもの？

俺はすぐには想像がつかなかったが、女の子だし、ゴキブリとかネズミとか、そんな類だろう。

「よし、じゃ、ついて行ってやるから部屋に戻るうな？」

俺は怖がる伏の頭を撫でながら優しく言う。

「……うん、怖いけど……お兄ちゃんが一緒なら……」

俺は伏が開けっ放したドアを出て、隣の伏の部屋に向かう。

伏は俺の背にぴったりとくっついてついてくる。

最近計算高く腹黒い伏ばかり見てきたから、こういう伏も可愛くていいよな。

俺は、伏の部屋のドアを開ける。

そういえばこいつの部屋に入るのは初めてだな。

初めて見るその部屋は、俺の部屋とほぼ同じ構造で、だが、そこに置かれた家具類や小物は、いかにも女の子の部屋って感じのものばかりで、あと、伏の匂いが漂っている。

いや、伏の匂いだけじゃない、なんだか別の甘い香りもする。

芳香剤なりポプリなりの匂いだろうか。

間違いなく伏はここで生活をしているんだろう。

さて、どこに何がいるんだ？

俺は部屋の外から慎重に中の様子をうかが……。

ドンッ！

後ろから体当たりを受け、俺は部屋に押し入る。

「ふ、伏？」

驚いて振り返ると、伏はにやり、とあの計算高い企み顔を俺に向け、入り口のカギを閉める。

「お前、いったい何の目的だよ！」

「決まってるよね。お兄ちゃんに可愛がってもらうの
私の部屋でって、やっぱり憧れるよね」
初体験は

伏が夢見る少女のような表情で両手を胸の前で組む。

「知るか、帰るぞ！」

俺は伏を押しつけてドアを開け……。

「お兄ちゃん、行っちゃ、やだあ」

妙に艶めかしい声で伏がそう言っただけにしがみつく。

伏の身体が俺の腕に当たって、薄い脂肪の柔らかい体の感触が伝わってくる。

ええい、そんなのいつもの事だろ。

そろそろ慣れるよ俺！

だが、なんか、もうね……。

やべっ、妙にムラムラ来る。

伏に抱きつきたい。

服を脱がせて全身頬ずりしたり舐め回したりしたい。

全身と全身で、何て言うかこう、愛し合いたい。

感情が妙に高ぶる。

なんなんだこれは！

「かかったねお兄ちゃん」

勝ち誇ったように伏が言う。

そんな表情も可愛い。

抱きしめて滅茶苦茶にしたい。

「な、何がだ……？」

俺は感情を押し留めて、かろうじて聞き返す。

「この部屋にはあらかじめ男の人がムラムラするお香が充満してたのよ。これでお兄ちゃんはどうしても私を抱かないと気が済まないでしょ？」

確かにそうだ。

ああ、くそつ。

そこまでして俺に抱いて欲しいのかよ！

何て可愛い奴だ。

これは抱いてやらないとな！

つて、落ち着け俺！

既に感情が流されてる！

駄目だ、勢いで女の子をどうこうしちゃ駄目だ！

だが、俺の心はもうどうにもしようがないくらい高ぶってる。

マイサンも、ギンギンだ。

目の前の獲物を狩り、この生意気で勝ち誇ってる女を俺のものにして俺の下で泣かせたい。

ああああああああつ！

もう駄目だ！

こいつ抱いちまえよ！

それで誰が困るんだよ！

だが、俺は最後の一步で踏み止まる。

「さ、お兄ちゃん、ベッドはこっちだよ」

俺の手を引く伏を振りほどき、俺はその場でズボンとパンツを下す。

「お兄ちゃん！？ 早いよ、ベッドまで」

そしてその場に座り込み、むんずとマイサンをつかむ。

俺に残された最後の砦、それは、G行為。

妹の部屋で、妹に見られながらのG。

いいじゃないか、俺はどうせ変態なんだよ！

「うおおおっ！」

「ちよとお兄ちゃん！ それ卑怯！」

伏に腕にしがみつかれる。

それすらも俺にとつては、俺のGにとつてはプラスにしかならなかった。

マイサンは一瞬で果てる。

伏は悔しそうにそれを見る。

「で、でも、まだまだっ！ お兄ちゃんはそんな程度じゃないでしょ！ まだ収まらないでしょ！ 次は私をつ！」

「何度でも！ 俺の精も根も尽きるまで、何度でもやってやる！ いいか、何度でも、だ！」

俺は腱鞘炎を恐れず、右腕を全力で振り回す。

その後の事はほとんど覚えてない。

十二回くらいまでは覚えているんだが、その後どうなったかは覚えてない。

伏が俺に抱きついたり裸になったりしたが、それは俺の行為を手助けすることにしかならなかった。

気が付くと俺は、廊下にいた。

伏の部屋の前だ。

だるい。

下半身は裸のままだ。

多分気を失うまでやって、伏に追い出されたんだろう。

俺は、勝ったんだ。

足腰立たないけど、何とか伏の魔の手から貞操を守り切った。俺は生まれたての小鹿のようにゆっくりと立ち上がる。

「あれ……」

俺の下半身は裸だった。

周りにズボンもパンツもない。

まだ伏の部屋の中だろう。

中に入るのは恐ろしいが、あの香りももうないだろうし伏も寝て
るだろう。

そつとドアを開けようとすると、鍵がかかっていた。
そう来るか……。

俺は下半身裸のまま部屋に戻った。

ロリータが妹をストーキングする。

幕間 研究者のストライプ

「とりあえず、昔の地図と比較してみました。が、風楼家があった辺りはちょうど領主の住んでいた城の中になりますね」

ホテルの一室。

樋田は、ノートパソコンに計算処理をさせながら説明する。

スーツを着ているが、いかにも研究者や出来るエリートサラリーマンの風格だった。

「つてことは、もし昔から住んでいたら、風楼家は領主の敷地内に住んでたことになるわね」

考え込む結衣。

だが、ホテルのベッドでうつぶせに寝そべって足をぶらぶらさせている姿は、どう見ても退屈そうな中学生のそれだ。

「それは分かりませんね。あの土地に後から引っ越したかもしれませんが」

「んー……風楼家がいつからあそこに住んでるのかわからないものかな？」

「そりゃ、近所で聞き込みをすれば分かるかもしれませんが、なかなか難しいですよ。下手をすれば本人達に『聞いて回ってる人がいる』と通報されかねませんし」

もちろん、相手に怪しまれずに情報を引き出す事も出来ない事もない。

だがそれは、聞き込みのスキルが必要で、天才の部類に入る彼らとしてもその分野では素人ではあるので難しい。

「役所で調べられないの？　そういう履歴って」

「難しいでしょうね。特に今は個人情報に厳しくなってますし」

「何とかしなさいよ！」

結衣は足をばたばたさせながら怒鳴る。

「出来ませんよ、ハッキングでもない限り」

「じゃ、ハッキングしなさいよ！」

「犯罪ですよ。それにそんな技術ありません」

「なーんーとかー！ーっ！」

結衣は仰向けになったりうつ伏せになったりしながら、手足をばたばたして暴れだす。

「面倒くさい上に、ほこりが立つのでやめてください」

樋田はうつぶせになった瞬間に、ぐい、と背中を押して、それを止める。

「むがあああつ！」

ごろごろ転げまわるのは止まったものの、手足は自由なままなので、足はばたばたと暴れ、手は樋田を攻撃しようと暴れる。

樋田ははあ、とため息を一つついた。

「……あまり使いたくない手ですが、大学時代の知り合いにハッカイがいます。彼に頼んでみましょうか」

「そんな知り合いいるの？ 技術持ってるの？ 自称ハッカーなんて大抵はこけおどし程度の知識しか持ってないわよ？」

結衣は暴れるのをやめ、起き上がって樋田の顔を見ようと思ったが、樋田が背中を押さえるのをやめなかったので、首だけを上にあげる。

「彼は恐らく本物ですよ。留年してて大学に結構長くいますが、在学中に所長の事も調べていたとか言っていました」

「私のこと……？」

「……………」

樋田は一瞬だけ、言うためらった。

「所長は右の尻にほくらがありますか？ 彼はそれを知っていましたよ？」

「え？ ええっ？ 何でそんな事知ってんのよ！？」

結衣が樋田に押さえられたまま、自分の尻を押さえる。

「やはり、あるのですか？」

「知らないわよ、自分のお尻のほくらなんて！　むしろ鏡見てチエックしてる方が変な人じゃないの！」

「そうですね、所長ならあるいはと思ったのですが」

「あんたの中で、私はどんな人間なのよ！」

「変な人です」

「うがあああああ」

結衣は再び暴れだした。

「じゃ、とりあえず彼の腕を見るために、確認してみますか？」

「え！？」

結衣がぴたり、と暴れるのをやめる。

「だ、駄目よ！　見ないで！　やめてよっ！」

尻とスカートを押さえつつ、樋田から逃げようとする結衣。

「別に僕が見るとは言ってますよ。所長が自分で確認してみますか、と言っただけです」

「あ、あ、そう……」

ようやくおとなしくなる結衣を解放する樋田。

結衣はベッドから起き上がり、バスルームへと向かう。

「じゃあ、確認してくるけど、覗かないでよ」

「覗きませんよ。というか、僕をどんな目で見てるんですか」

「下僕！　奴隷！　下っ端！」

「よし、労働基準監督署はこの番号かな」

「待つて！　部下！　優秀で頼れる部下！」

結衣がダッシュで戻ってきて、携帯を持つ樋田の右手にしがみつ

く。

「よろしい。所長はもっと自分の立場をわきまえるように」

「うん、ごめんなさい……あれ？」

結衣は、自分の立場に少し疑問を持つが、樋田が睨むので何も言い返せなかった。

「さあ、早く確認してくるのです」

「う、うん、あのね？　出来たらでいいんだけどね、覗かないでね……？」

純真な目で懇願されると、樋田もこれ以上はいじれなかった。

「僕はそんなことはしません。安心してじっくり自分の尻を観察してきてください」

「うん……」

結衣はそそくさとバスルームへと消える。

ドアを閉じる前に一度だけこちらを覗いて、来てないことだけを確認した。

「全く、そんな恥じらいがあるなら、夜寝る時も持っていて欲しいのですが……」

樋田はまたため息をつく。

結衣は抱き枕の代わりになる大きなぬいぐるみがないと眠れないが、旅行に持ってこれないため、代わりに樋田を抱き枕にして眠っているのだ。

見た目が中学生とはいえ、同じ歳の少女に抱きつかれて眠るというのは、樋田にとって拷問に近い。

何しろ相手は結衣だ。

一ミリでもムラつと来たら、後で大きな自己嫌悪に陥ってしまう。だが、結衣も小さいが可愛い女の子であり、寝息や寝言を聞いていると、どうにもそういう気分にならない方がおかしい。

「あつた！」

樋田に最大限女の魅力を振りまいている少女は、今一人で鏡に向かって尻を出して叫んでいる。

「あつたよ、ひだぶっ！」

ガゴン！

バスルームで大きな音がした。

「痛い、パンツ上げるの忘れてた……」

そんな声に、頭を押さえる樋田。

それから一分くらい、「痛い痛い」と声が聞こえてきて、その後やっと結衣が出てきた。

「あつたよ樋田！ その人凄いね！」

無邪気にハッカーを称える結衣。

「……まあ、所長がそれで満足ならいいです」

自分の身体の、普段見せない部分の秘密を、見たこともない他人が知っていたら、普通は気味が悪いものだ。

そう考えない者は幸せなのかも知れない。

あるいは不幸なのかも知れない

ともかく樋田は何も言わなかった。

更に、そのハッカーが重度のロリコンで、当時十歳を少し過ぎた程度だった結衣の事をストライクゾーンの対象者として見ていた事も黙っておく事にした。

「とりあえず、彼に連絡してみましょう。頼みを聞いてくれればいいのですが」

樋田は再び携帯を取り出し、アドレスを漁る。

「大学時代の友達」カテゴリの中から、一つの電話番号を見つけ、ボタンを押す。

『久しぶりだね、ジヨニー。僕だ、ノブティーだ』

樋田が陽気な口調と流暢な英語で話す。

「あんたって、そんな陽気にも話せるのね。っていうかノブティーって誰よ……」

ともかくこう見えて、大学時代はそれなりに陽気な学生だったよ
うだ。

『ああ、そう、彼女のところまで働いてるんだ。いや、もう君の対象外かもしれないね、はははは』

結衣も当然英語は話せるので、話の内容は分かる。

だが、何を言っているのかまでは分からない。

おそらく電話でなく、目の前に二人がいて、会話していても分か

らなかっただろう。

『ところで君の力を借りたいんだ。いや、君の研究は尊敬に値するがそっちじゃない。そうそっちの方だ。いいのかい？ さすがは偉大な僕の友達だ。うん、今から詳しい話を話すよ、いいかい』

樋田は、ハツカージョニーに調査対象について話す。

結衣はじつとそれを聞いているだけだったが、樋田が間違いなくこの街の風楼家について、所有する土地の所有開始日時や歴史的な経緯、また一家の分かる範囲での情報を調べて欲しいと頼んでいたのを聞いていた。

『報酬？ いいよ、僕に払える範囲なら。君の事だからお金じゃないんだろ？ ……ふむ、それは僕からは聞きにくいな、本人に直接聞いてくれないか』

樋田はそう言つと、携帯を結衣に手渡す。

「？」

いきなり携帯を渡された結衣は不思議そうに樋田を見上げた。

「代わつて欲しいそうです。聞きたいことがあるみたいで」

「うん、わかった……」

結衣は不思議そうに携帯を耳に当てる。

『こんにちは、初めまして。え？ う、うん。あ、うん……、えつと、水色と白のストライプかな。え？ やつてくれる？ 力が出た？ うん、じゃ……』

結衣は携帯を切り、樋田に返す。

「やつてくれるって。私のファンだから、声を聞いただけで十分だつて」

結衣は戸惑いながらも、少し嬉しそうにそう言った。

樋田はジョニーにも結衣にも色々突っ込みたいことはあったが、黙つてため息をついた。

「まあ、所長とジョニーがそれで満足ならいいです」

樋田は携帯をしまつて、更にもう一度ため息をついた。

「ま、彼の仕事は早いので、今日中に調査もし終わる事でしょう。」

それまでこちらで出来る事ありませんからのんびりしましょう」

樋田はパソコンの電源を落とし、ソファに腰掛ける。

「うん、じゃ、のんびりココアを飲むわよ！ この前買ったやつ！

樋田は準備！」

「自分でしてください」

樋田がけだるげに、結衣を見もせずにつ。

「樋田はいつかひどい目に遭う！」

物騒な事を言いながらも棚からカップを二つ用意していた。

次の日の朝、伏はいつものように前の日のことがなかったかのような反応かと思っただが、はつきり不機嫌だった。

台所に行くと、不機嫌な伏が全身から不機嫌オーラを出していた。

俺が降りてきたのを見て睨み付け、ふん、とそっぽを向いた。

「お、おはよう」

俺はその不機嫌な様子に圧倒されつつも、挨拶をした。

「おはよう、おな兄ちゃん」

伏は不機嫌な表情のまま、それでもきちんと挨拶を……。

オナニーちゃん！？

いや、聞き間違えかな？

昨日の罪悪感が俺にそういう聞き間違いをさせてしまったのかもな。

「あー、体がイカ臭い！ 昨日、どこかの意気地なしが私の部屋で汚いもの出しまくってったせいかな」

怒ってる！

逃げたことよりも、部屋をアレまみれにしたことを怒ってる！

確かにティッシュも何もなく、部屋の中に放出し放題だったから、普通なら怒る。

「……ごめん」

「何謝ってんの、おな兄ちゃん？」

「悪かったからその呼び名はやめてくれないかな？」
俺が懇願の表情で伏に訴える。

「だから、何が悪かったの？ 何をしたの、おな兄ちゃんは？」

「その、お前の部屋で……いろいろとさ……」

「いろいろって何？ 何したんだっけ？」

伏の追及は止まらない。

やばい、伏は本気で怒ってる。

「その……おな……」

「なあに？ おな、何なの？」

なんだこの羞恥プレイ。

そんなもん母さんと妹の前で言えるかよ！

「い、行つてきますっ！」

俺は飯も食べずに家を出た。

「あ、ちょ、ちょっと！」

さすがにそれは予想外だったのか、伏が慌てて追いかけてきた。

このままダッシュで学校まで行こうと思ったが、朝食抜きにはかなりきつい。

俺はすぐに走るのをやめ、歩くことにした。

「もうっ、お兄ちゃん自由なんだから！」

追いかけてきた伏にそう怒られる。

いや、ミスフリーダムには言われたくないな。

「ま、でも、さっきは言い過ぎたね、ごめん」

さっきまでの熊殺しの目とは違い、いつもの伏の表情だ。

どっちが本当の伏なんだろう。

いや、どっちも伏なんだろうけどさ、長く生きてるといろいろ人格もあるんだろうし。

「いや、まあ、俺も部屋汚して悪かったな……」

正直、それに関しては本当に申し訳ないと思っている。

緊急避難なんだろうけど、他にもいくらでもやりようがあったか

もしれない。

「まあ、仕方がないね。許してあげるけど、ただじゃ嫌だよ」

「何だ？ 子種以外なら大体のものは構わないぞ？」

「んー、じゃあ……」

伏は口に指を当て、少し考える。

「今日服買いに行くんだけど、それに付き合って？」

はっと思いついたように言う。

「まあ、それくらいならいいけど」

別にどうせ一緒に帰るし、そのまま買い物に付き合う程度の話だろうし、こんなことがなくても付き合ってもいいくらいだ。

「本当？ じゃ、放課後に！」

そう言っ伏はぴょん、と跳ねた。

髪がふわりと舞った。

幕間 研究者とハツカー

「あ、ジョニーから返事が来ましたよ」

「んあ？」

中華料理店の奥の席。

樋田が持ち込んだノートパソコンでメールを確認して、報告をする。

情報を迅速に知りたいであろう結衣のためにわざわざ持ち込んでチェックしていたのだ。

結衣は、から揚げを口いっぱい頬張っていた。

「そんなことより、このから揚げおいしいよ！」

結衣の方は、それよりも目の前の料理に夢中だった。

「まあ、食べながら聞いててください。メールをある程度要約して読みますので」

「うん、この春巻きもおいしい！」

「笑わせて吹き出させてやりたいですが許しましょう。えーっと、あの土地は少なくとも資料にある限りではずっと風楼家のものですね。ただしそれも昭和初期までしか辿れなかったようで、それ以前は不明だそうです」

樋田は淡々とメールを読む。

「で、我々と同年代の二人は近くの高校に通う高校生の兄妹で、兄の拓海さんは成績も普通で、問題のある生徒ではないそうです。妹の方は最近あの高校に転校してきたようで、それ以前どこにいたかまではたどれなかったみたいです。おそらく海外に居たのでは、との事です。学校の記録ではそうになっていたようです」

そこに注記で「あと三年早く出会いたかった」と書いてあったのは無視した。

「むぐむぐむぐう」

「人間の言葉で喋ってください」

樋田は振り返りもせずに、結衣に言う。

「あのお父さん、勝徳さんとおっしゃるそうですが、彼はニートだそうです。これまでに一度も働いた形跡がないそうです」

「うえ？ うあうおほひえ？」

「お会いした事ありませんが、奥さんは祥陽さん。専業主婦だそうです」

「うおうえっへうおはひうはうい？」

面倒になり、イライラもしてきたので、樋田は結衣の前のから揚げと春巻きを取り上げた。

「むう！ むぐう！」

結衣は取り返そうとするが、樋田はそれを上に掲げて、結衣の手の届かないところへと持って行った。

口の中の食物はすぐになくなり、普通に喋れるようになった。

「何すんのよ！ まだ食べたい！」

「食べながらいいと言いましたが、やっぱりやめてください」

「食べる！ まだ食べる！」

結衣が必死に樋田から料理皿を取り返そうとする。

「……じゃ、食べてもいいですから、喋れる程度にしてください。喋れなくなった瞬間、これは僕のものになります」

「え！？ ……わ、分かったわよ」

妙に緊張しながら結衣が答える。

一応は彼女も素直になったので、樋田は続きを話す。

「おそらく、さっき所長が言いたかったのは、あの一家の収入のことでしょう。それはジョニーも不思議に思って調べたそうです。すると、毎月市から一定額が彼の銀行口座に振り込まれていたそうです」

「市から？ それは病気なんかで働けない人がもらえる給付金みたいなもの？」

結衣は春巻きを口に入れながらも頑張つて喋る。

「どうも、その手の予算から出ているようではないようです。予算の出所から言えば、機密に類する予算ですね」

「……なによそれ、つまりあの人は市から機密費をもらって、働かずに生きてるの？」

「そういうことになりますね。そして、歴史的背景から考えるにそれは不老不死に関する機密。となると――」

「あのおじさんが、不老不死の生き神？」

「その可能性が高いですね」

樋田はパソコンをしまい、食事に戻る。

「もちろん、そうでない可能性の方が高いですし、僕は今でもその存在は信じていないのですが、調べる価値はあるでしょう」

「むうん」

結衣は腕を組んで考える。

「……そうね。早速昼からあの家に行きましょっか、ううん、今から！」

結衣は立ち上がる。

「行くわよ、樋田！」

「僕はまだ食事中です。もう少し待ってください」

樋田は平然と座り、食事を続けていた。

「遅い！ のろま！ 置いてくわよ！」

いつも食事が遅いと言われている結衣はここぞとばかりに樋田を責めた。

「別にいいですよ、置いて行っても。一人でたどり着けるなら」

「た、たどり着けるわよ……！」

昨日行っただけの道ではある。

だが、結衣が覚えているわけがないと樋田は思っているし、事実覚えてはいなかった。

「万一たどり着けたとしても、どんな駆け引きであの人から情報を得るのですか？ 所長に出来ますか？」

「う……。で、出来るわよ！ 出来るけど、樋田が可哀想だから待っててあげるわよ！」

結衣は座り直す。

「そうですか。ありがとうございます」

「つて、なに人のから揚げ食べてるのよ！」

「所長は既に食事を終えているのでしょうか？」

「終えてない！ 食べる！ まだ食べるの！」

結衣の声が、店内に響き渡った。

「いませんね」

風楼家の家の前。

何度も呼び鈴を押しが誰も出て来ない。

「なんでよ！ ニートなんでしょ？」

「ニートと引きこもりは違いますよ。働いていないからといって、家にこもってるわけでもないです」

「あーもう、こんな時に！」

結衣は手をばたばたと振る。

「いや、こっちの勝手な都合でしょう」

あまりの理不尽な物言いに、樋田はついフォローした。

「それに急がないと逃げるわけでもないですから、出直しましょう」
結衣はぶつぶつ言うが、それに従う。

風楼家を背に駅の方へ戻る二人。

結衣はずつと不満をばやいていた。

「はあ、こんな事ならもう少しじっくり中華料理を食べておけばよかった！」

結衣は手ではばんばんと自分の横腿を叩きながら言う。

「所長は中華が好きなのですか。初耳でした」

「今が中華の気分なの！」

それくらい分かるでしょ、とでも言いたげに結衣が言う。

樋田は面倒なのでスルーしようかと思ったがふと、聞いてみたいことがあった。

「では、夜には何の気分になりますか」

「そんなの分かるわけないでしょ」

「焼肉」

「え？」

樋田が唐突に言うので、結衣も戸惑う。

「カルビ、タン塩、豚トロ。焼きたてはおいしいですね。秘伝のたれがある店なんて、最高ですよね」

「う、うん……」

結衣は樋田の言葉にそれを想像し、軽くよだれが出そうなほどになっていた。

「焼肉？」

「焼肉！」

不思議な会話が成立した。

「今夜は焼肉！」

昼を食べ終わって一時間も経っていない午後に、彼らは既に夕食のメニューを決めた。

「今夜は焼き肉にして、性……精をつけよう！」

伏の要望で服屋に向かう途中、突然そんなことを言い出した。

こっちは真希の恨みがましい目を振り切って伏とこっちに来て、呪われないか気が気でなかった。

「焼き肉か。まあ、精が付くかはともかく、嫌いじゃないな」

ま、焼き肉が嫌いってのはマイノリティーだろう。

「じゃ、決定！　今夜は焼き肉！　媚や……ニンニクとショウガも入れないとね」

「ちよつと待て、今、何て言いかけた！」

媚薬って言わなかったか？

まだあれをするつもりか？

俺を内部からムラムラさせるつもりか？

あれはきつかった！

これまでの攻撃の中でも最大級にきつかった！

あれだけ部屋を汚されて、まだ懲りないのか？

いや……こいつの目的は、俺の部屋だ。

わざわざこいつの部屋に行かせる必要はない。

俺の部屋でやればいいだけだ。

俺が部屋を汚すのに一瞬でも躊躇すれば、そこをつかれる。

まずい、これはまずい。

「よし、焼き肉は中止！」

俺は一方的に宣言した。

「ええええええっ！　どうしてよっ！」

伏が不満げに声を上げる。

「今日は焼き肉の気分じゃないんだよ、今日はイタリアンがいい」

「わかったよ、じゃあペロンチーノね。ガーリックが匂いを消してくれるから」

「いや、和食がいい！ そばだ、そう、そばがいい！」

「……………」

伏が無言で俺を睨む。

腹黒い伏じゃなく、可愛い伏の方で、どっちかと言えばすねて膨れている感じた。

「わかったよ。ち……そばね？ もう絶対変えない？」

ん？ なんか言おうとしてなかったか？

まあいい、そばなら余計な味を混ぜるとすぐにわかる。

ネギもシヨウガもワサビも使わなきゃいいんだ。

俺の勝ちだな、これ。

「おい、いいぞ？ 絶対変えない」

俺は絶対の余裕を持ってそう返した。

すると今の今まで悔しそうな顔だった伏が、にやり、と笑う。

「そう、絶対変えないならいいかな。中華そばで」

諮られた！

「いや、中華じゃなく普通の」

「もう変えないって言った！ もう変わらない！」

くっ、やられた。

まあ、こいつの調理をずっと見てて、怪しい動きを封じればいいのか。

「わかったよ。それでいい」

俺はより深い罠にハマろうとしていたのかも知れない。

妹は不老不死。

幕間 研究者と生き神？

「疲れた」

結衣がぼそりと言う。

「そうですか。それはともかく」

「疲れた！」

今度は大きな声で言い、手をばたばたと動かす。

「元気そうですね」

「疲れたって言ってるでしょうが！」

結衣が言うが、樋田はあっさり無視しようとしたので、彼女は座り込んだ。

「疲れた！ もう動かない！ 樋田の出来る事は私をおんぶするか、休憩を取る事！」

結衣のわがままは今に始まった事ではなく、樋田も慣れていたが、それでもため息を一つ吐き出した。

「うーごかーないー！ー！」

そう大声で宣言した結衣は、一步も動く気配はなかった。

確かに樋田も多少は疲れていた。

駅前にあるホテルと風楼家を三往復半。

四度行ってもずつと留守だったため、今は四度目の復路なのだ。

短時間に四度も訪れたのは、結衣のせいなのだ。

ホテルに戻って、部屋をうろうろとして落ち着かず、すぐに「行くわよ！」と言ってまた出てくる。

のんびり確実にいるであろう時間まで待つなり、風楼家の周辺で時間を潰すなどという発想は彼女にはないのだ。

「コーコーアーのーむー！ー！」

元気にそう叫ぶ結衣を一番苦しい目にあわせるにはどうすればい

いかを知らず知らずのうちに心で考えていた樋田。

「ホテルに戻れば休憩なんていくらでも出来るじゃないですか」

「嫌！ ココア飲みたい！」

「この前買ったのがあるでしょう」

「他のを飲むの！」

「……まあ、いいですけど」

樋田はため息をもう一つ吐き出した。

普通に喫茶店にでも行こうと言われたら、断る理由はない。

だが、こつも駄々とながままから始まると、こちらからまずはスル
ーから入ってしまう。

これまで飛び級や若いうちからの就職で、これまでずっと周囲が
年上ばかりだった事もあり、甘え体質があるのかもしれない。

そんなどうでもいい事を考えつつも樋田はココアのある喫茶店を
頭の中でリストアップした。

そんな余計な知識を詰め込みたくはなかったのだが、結衣と行動
を共にしているとその知識は必須なのだ。

「あ、あれはおじさん？」

樋田が最も近く、結衣も気に入っている店を頭の中で検索し終え
た頃、彼女がある方向を指差した。

そこには確かに風楼家の主であり、不老不死と予想される、風楼
勝徳が街角を悠々と歩いていた。

「チャンスよ！ さっさとココア飲んで行くわよ！」

「アホですかあんたは」

「なにがよ？」

店に向かおうとする結衣の手首を掴む樋田。

「ココア飲んでる間にどこか行っちゃいますよ」

「仕方がないわね！ ココア飲んでる間待っててって言うといて」

「言えるわけないでしょう、ほらさっさと行きますよ」

樋田は結衣の手を引く。

「いーやー！ コーコーアーーーー！」

半泣きの結衣を連れて、樋田が走る。

ゆつくりと街を歩いていた勝徳には、それでも簡単に追いついた。

「こんにちは、風楼さん」

樋田がまずは声をかける。

「おや、確か樋田君と、水上さん。奇遇だね」

勝徳は二人に気づくと、にこやかに挨拶を返す。

「ココア！」

「？」

「ココア飲むの！」

半泣きでいきなりそんな事を言われた勝徳は、それでも冷静に対応した。

「そうか、ココアが飲みたいのか。どこかに行くかい？」

樋田は所長の言う事は気にしないでください、などと言おうと思ったが、一緒に喫茶店に行くのは絶好の機会だと判断し、黙っていた。

「うんっ！」

結衣は嬉しそうに笑い、勝徳はそれを見て、やはり微笑んだ。

このまま喫茶店へ行つて、それとなく相手を探ろう。

そんなことを考えていた樋田の計画を、思いつきり破壊したのは、結衣だった。

「ねえ、おじさんって不老不死？」

直球も直球、これ以上、簡潔に言いようのないくらいの直球で、結衣が聞く。

樋田はしばらく、結衣の言葉の意味を理解していなかった。

どうせまたいつものくだらない話だと考えてスルーするつもりだったからだ。

更に、さすがに結衣とはいえ、この状況でそんな事を言うとは思わなかったのだ。

「あー……すみませんね、うちの所長が馬鹿な事言い出して」

樋田は拳で結衣の頭をぐりぐりと地味に痛めつけつつも、そう言われた勝徳の様子をじつくりと探っていた。

「ふむ……確かに面白い子だね」

勝徳は表情を見せない。

相変わらず、穏やかに笑いながら二人を見返していた。

「しらばつくれても無駄よ！　あなたが不老不死だってことは既にばれぶごう！」

樋田は結衣の口を塞ぐ。

これ以上彼のシナリオを変更されても困るからだ。

とはいえ、ここまで話してしまった以上、少しずつ話を引き出すという、最初の策はもう無理だろう。

ならば作戦を切り替えるしかない。

「すみませんね、うちの所長は知ってる事を全て言わなければ済まない人間なんで」

「そうか。ふむ、そんな性格は嫌いじゃないが、おそらく体力がいる生き方だね。それに人から嫌われる恐れもある」

「おや、気が合いそうですね。僕もそう思います」

樋田は、結衣の口だけでなく、何となくついでに鼻もつまみながらにこやかにそう答えた。

「特にこのような、ご自身が黙って秘密にしているようなことを、こんな場所で大声で言うものではないですよね」

樋田の、カマをかけた言葉にも、勝徳は応じない。

ただ、ニコニコと笑っているだけだ。

結衣は息が出来なくなり、もがき苦しんでいる。

「しかし、我々も研究者として、発見したものを見過ごす事は出来ないのです。どうか協力していただけませんか？」

樋田の要求。

それでも態度を変えない勝徳。

死にかけている結衣。

「一つだけ、本当のことを言おう」

表情を変えないまま、樋田を見つめる勝徳。

「今から言うことは、真実だ」

堂々と、にこやかな口調は変わらないが、断定的で有無を言わさない物言い。

「私は、不老不死などではない。証明は、死ななければ出来ないかな？」

勝徳は、少し冗談ばい口調を交える。

「君達も伝説は伝説として、調べるのはいいんだが」

「では、一度死んでいただきましょうか」

勝徳の言葉の最中、樋田がそれを遮って、ポケットからナイフを取り出す。

軍人が持つていそうな、街で職務質問されて出てきたら、逮捕されそうなナイフだ。

「ほう……立派なナイフだね」

「ぶはっ！ はあ、はあっ……ひ、樋田！？」

樋田の手から開放された結衣すらも、樋田の突然の行動に慌てる。「刺して、私が死んだら、君は殺人犯、よくて殺人未遂と傷害なんて重罪になるんだけど、君の一生はこんな親父に捧げられるほど安っぽいものかい？」

刃物を目の前にしても、全く動じない勝徳。

距離を取る、防御の構えをするなどということもなく、刺したいのなら刺してみろと言わんばかりの態度だ。

「僕の一生は、この所長に関わって以来、ずっと安っぽいものですよ……！」

言い終わるが早いか、樋田はナイフを勝徳の胸に突き立てる。

勝徳は避ける動作も見せず、平然とナイフと樋田を見つめていた。

「ちょ……え？ 樋田っ……！」

樋田が持つナイフが勝徳の胸の辺りに押し入り、もはや柄しか見えない。

「少しは怖がったりした方がそれっぽいですよ」

樋田はさっとナイフを引く。

「いや、私も同じナイフを持ってるからね。君の考えている事は分かっ

かってしまったんだよ」

お互いに笑う樋田と勝徳。

「え？ え？」

一人意味の分かっていない結衣。

「ダミーナイフですよ。刃がプラスチックで、押すと柄の中に引込むタイプの」

樋田はナイフを引き、結衣に分かりやすく刃の部分を押しを見せてる。

「失礼しました風楼さん。ですが、これではあなたが不老不死でないという証拠が」

ボンッ！

樋田が勝徳に話をしている時、彼の背後で大きな音が響いた。

向かい合う勝徳の視線と表情。

後ろは交通量の多い道。

車の事故か、などと考えながら振り返る。

彼が見たのは、制服を着た少女が、頭から地面に叩きつけられる瞬間だった。

今になってやっと響くブレーキ音。

どう考えても女生徒は助からない状況だ。

状況が分からない。

横断歩道でもない道の途中。

自殺でも考えない限り発生し得ない現状だ。

道路の向こうから、男子生徒の叫び声がする。

どこかで聞いたその声の主を確認している最中。

「む、まずい！」

勝徳が叫ぶように言い、事故現場へと走り出す。

周囲もまだ状況を理解していない事故直後。

樋田も、結衣も、呆然とその状況を見ることしか出来なかった。

「結局買わないのかよ！」

服を買いに行くから、と言った伏だったが、結局何も買わず店から出てきた。

駅前の大通り沿いを歩く俺と伏。

目の前の道は結構広く、車も多く行きかう。

そんな中、俺は徒労に肩を落としていた。

一軒だけって話じゃない。

七軒回つての話だ。

こっちは無駄に疲れた。

まあ、可愛い妹の着る服だから、俺も一生懸命に選んださ。

伏はそれを全部試着して見せて、俺も可愛いと思ったし、じゃあ買えばいいんだが、買うところまではいかなかった。

「ま、今日は見に來ただけだからね」

「じゃあ。最初からそう言えよ。俺は結構本気で選んだんだぞ？」

「うん、お兄ちゃんの好みは分かった。買うときはそういうの選ぼうかな」

「……したけりやそうしろよ」

真正面から言われると照れくさいもので、俺はふい、と横を向いた。

「ん？」

横を向いたその先、大通りの向こうには親父がいた。

それに向かい合って、身長差のある二人組が立っていた。

「あれは、結衣と樋田か？」

少し遠いが、おそらく親父と話す二人組というあの二人しか思

い浮かばない。

「え？ どこ？」

伏もそつちを見る。

「あ、本当。何してるのかな？」

「さあなあ。また親父が変な要求してなきゃいいんだがな」

あの親父のベストストライクゾーンだからな、結衣は。

結構穏やかに話してるから大丈夫だとは思うが。

ん？

樋田が何か出したな。

あれはナイフか？

何するつもりだよ、あいつ。

「あつ！」

俺と伏の声が重なる。

樋田が、そのナイフで親父を刺したからだ。

え？ 見間違えか？

いや、本当に刺してるように。

「勝徳さんっ！」

伏が、走り出していた。

しかも、一直線にだ。

俺たちと親父たちとの間には車通りの激しい道があり、それは信号でもない限り渡れない交通量だ。

だが、それがまったく見えないかのように。伏は走り出した。

俺はそれを止める間もなかった。

車は、急に飛び出して来た者に対して、何の容赦もなかった。

減速するまもなく、伏は車にはねられる。

ボンッ！

当たりの人が全員振り返るくらいの大きな音が響く。

伏が上空へと浮かび上がる。

妙にゆつくりと、放射線状に落ちていく伏。

地面には頭から叩きつけられ、体がそれに続き、一度ハウンドをした後、アスファルトに沈む。

辺りには血飛沫が舞う。

伏は痙攣すらない。

これは、かなり派手な事故だ。

普通の人間なら即死なんてもんじゃない。

伏なら生きてるだろう、だが、体の損壊が激しい。

どうする？

どうしよう。

俺はその場から一步も動けずにいた。

手足が震えている。

何とかしないと、でも何をすればいいんだ？

「拓海！ 手伝え！」

親父の怒鳴り声に、俺はやっと我を取り戻す。

「あ、ああ……！」

俺は事故現場に走る。

親父が上半身を持っていたので。俺は足を持った。

「ひとまずここから逃げるぞ？」

「ああ！」

俺と親父は、呆然とする加害者を背に、死体にしか見えない伏を担いで走り去った。

「ここまで来ればいいか……すまんが拓海、後は一人で背負ってくれるか？」

親父の息が上がっていた。

まあ、運動まったくしてない親父だから仕方がない。

「わかった」

俺は伏を一人で背負うことにした。

伏は全く動かない。

全身の肌の色も俺の知るものじゃなかった。

白い肌も赤紫になっており、全身内出血してるんだろう。頭蓋骨は陥没してるかもしれない。

ナイフで刺されてすぐに治るのとはわけが違う。

これが治るにはどれくらいかかるんだろうか？

家に戻り、ソファに寝かせると、俺と親父はふう、と一息ついた。伏の様子はさっきと変わってない。

車にはねられてから結構時間が経ったが、全く変わってなかった。これは結構時間がかかりそうだな。

「あ、あの……」

遠慮がちに、声をかけてきたのは、結衣だった。

あれ、なんでこいつうちにいるんだ？

「どうして救急車を呼んだりしないの……？ 大怪我して、死んでるかもしれないのに、こんなところに寝かせておいていいの？」

結衣の疑問は当然の事だろうな。

だが、これはどう誤魔化せばいいんだろう。

いや、よく考えたら伏が走り出したのって、こいつらが親父刺してたからじゃないか？

「そういえばあんたら、さっき何してたんだよ。親父をナイフで刺そうとしてなかったか？」

「あの、その、それは……」

別に責める口調で言ったわけじゃないが、俺も少し動転してるので怒ってたのかもしれない。

結衣はしどろもどろで戸惑った。

「勝徳さんが、不老不死ではないかと、カマをかけていたのですよ」
結衣は俺が怖いのか何か後ろ暗いのか分からないが何も言えない。代わりに樋田がいつも見る表情と平然とした口調でそう言った。

「まさか、伏さんの方だとは思いませんでしたか」

悪びれもしない、あまりの平然とした口調に、俺は何も言い返せなかった。

それは事実であり、何一つ間違っではない。

さて、こいつらを説得しないとなあ。

「え？ あ、そうか！ だから救急車呼ばなかったんだ！」

結衣が初めて気づいたらしくそう言っただけ。

前々から思ってたんだが、この子は本当に天才なのか？

まずいな、こいつらが本当に天才だとして、不老不死なんて格好の研究材料をほっとくわけないよな。

俺は助けを求めるように親父を見た。

「言い逃れ出来ないな」

観念したように、親父は目を閉じる。

「そう、この子が不老不死だ。何年生きているかは知らないが、本人によると、少なくとも千年は生きているようだ」

今はとても生きているように思えない、遺体のような伏を見て言う。

まあ、正直に俺たちの使命までを言った上で頭を下げて懇願するのが一番か。

「殺しても死なない、刺しても死なないって、本当？」

それは後で思えば興味本位の言葉だったと思う。

だが、結衣のその言葉を聞いて、俺は冷静さを失った。

「てめえ！」

俺は立ち上がり結衣の胸ぐらをつかむ。

「きゃんっ！」

結衣の怯えた表情。

隣にいる樋田も立ち上がり緊張する。

「確かに、伏は刺されてもしないさ。でもな、刺されたら痛いんだよ！ 刺されて、死なないって事は刺されたままならずと痛いんだよ！ そんなことを興味本位で試そうとするなよ！ お前も同じ痛みをさせてやるからな！」

そんな言葉が口から出てくる俺に、俺自身が驚いた。

俺にとって伏は可愛いが厄介者だった。

あいつの行動一つ一つが面倒だとも思った。

だが、俺はあいつのそばで四回あいつが死んだのを見ている。その時のあいつの表情は苦しそうで、痛そうだった。

俺自身四回も殺しておいて、人が殺そうとすると激怒するってのもおかしい話だし、自分勝手な話だ。

そこまでわかっていて、それでも俺は怒った。

俺は伏を守る使命を持っている。

いや、使命なんてなくても、俺は伏を守る。

二度とこんな目には遭わせない！

「……は、はひ……」

恐怖で手足も声も震え、目から涙がにじみ出ている結衣。

あー……落ち着いてきたら、悪いことしたな。

俺は手を離れたが、ばつが悪いのでそのままソファに戻った。

「落ち着け、拓海。彼女は別に刺すとは言っていないぞ？」

ああ、既にもう冷静だよ。

だが、今更止められないだろ？

「でも、こいつらは親父は刺そうとしたんだろ？」

俺はそのまま怒りモードで突っ走ることにした。

「いえ、あれは玩具のナイフですよ。刺してもし違ったらただの通り魔ですし」

こんな最悪の空気の中でも、相変わらずの声と表情で樋田がナイフを見せる。

「所長」

「え？」

俺に怒鳴られた後、震えていた結衣が振り返った瞬間、そのナイフを胸に刺す。

「ぎゃあああああああ！」

結衣の本気の悲鳴。

いや、あんたは知ってるだろ。

「ほら」

樋田がナイフを抜くと、柄の奥から刃が出て来る。

結衣は怒鳴る余裕もなく、ソファに埋もれて震えていた。

それを見てると、俺もなんだか馬鹿らしくなってしまった。

あー、樋田は空気を変えるためにあんなことをしたのかもな。

「なあ、樋田君、水上さんも」

「分かってますよ。他言はしませんし、彼女に傷害を与えるような真似はしません。それは我々の本意ではありませんから」

父の言葉を遮って、樋田が答える。

「そうか、助かるよ」

父は、ふう、と深くソファに座り直す。

最初からそのつもりだったのかよ。

そうなると頭に血が上って怒鳴った俺は、自分が恥ずかしくなってきた。

ここは謝るべきかな？

「ところで所長、ちびりましたか？」

樋田が隣で呆然としてる結衣に聞く。

「うん、ちよっとだけ……ってちびってないわよ！」

「嘘はいけません。さっさと着替えてきてください。そのうち匂いますよ？」

「だから！　ちびってないって言ってるでしょ！」

場所柄をわきまえないというか、あえてそうしてる樋田に乗せられて、結衣も騒ぐ。

やっぱりここは謝らないとなあ。

「なあ、結衣」

「ひっ！　嘘です、ちびりました！　ただ漏れです！」

俺が呼びかけると、結衣は恐怖に顔を見開く。

「いや……怒鳴ったりして悪かったな。別にこいつがひかれたのもあんたらの責任じゃないし、用があるなら付き添う必要なんてないんだぞ？」

俺が言つと、結衣はじつと俺を見つめ、そして、伏を見つめた。

「……………」

伏はあれからかなり時間が経ったにもかかわらずいまだに交通事故遺体にしか見えない。

何でこんなに回復が遅いんだよ。

ナイフで刺しても呪い殺してもすぐなんだぞ？

「ねえ、この子、どれくらいで回復するの？」

結衣が親父に聞く。

「さあね、ナイフに刺されたくらいなら数秒で直るんだが、ここまでの大怪我となると、全く分からない。数時間なのか、数日なのか、数年なのか……」

親父が腕を組んでため息をつく。

俺も、何も言えなかった。

今回の事故は誰のせいでもない。

言ってみれば伏の自業自得だ。

だが、ここにいる全員、自分がどうにかすれば事故が防げたと思っ
っている。

不老不死でも痛みがある。

どれほどの激痛で、これからどれだけ眠り続けるのだろう。

俺だって苦しいが、無関係な結衣や樋田までそれを背負い込む必要はないだろう。

「なあ、あんたらはもう一旦帰……」

「樋田っ！」

思いつめた表情のまま、結衣は樋田を呼ぶ。

「ホテルから試薬の7番と9番持ってきて！ 大至急！」

なんだか分からないが、天才科学者である彼女が、何らかの対策をしようとしている。

「所長……」

樋田が、驚いたように声をかける。

「早く！」

何も聞くな、とばかりに結衣は樋田を急かす。

「自分で行ってきてください」

「うわーん！」

結衣は走って出て行った。

なんだこれ。

「……鬼だなあんた」

呆れた拓海が言う。

「それでもないですよ」

樋田は立ち上がる。

「所長はどうせ道に迷うでしょうから、僕も行って来ます」

そう言って、ゆっくりと立ち上がり、出て行った。

いや、だったら最初から行けよ。

一時間後。

結衣が泣きながら戻ってきた。

「なかった！ どうしてか、7番と9番だけなかった！」

さっきまでの静寂が一転大騒ぎになる風楼家。

「僕がタクシーで取ってきましたよ。ほら」

樋田が試薬のビンを見せる。

「何でこんなことに！」

「所長が取って来いと言ったんじゃないですか」

「言っただけ！」

……本当に鬼だな、こいつ。

「そんな些細な事より、この試薬を使うんでしょう？」

「そうよ！ 細胞の増殖を高める薬と、アポトーシス（細胞の計画的な死）による死滅を高める薬」

ずい、とそれを前に突き出す結衣。

なんだかよく分からないが、それがどうしたんだ？

「つまり、細胞の入れ替えを大幅に促進する薬です。試作品なので、多少調整されていないところもあります」

樋田が付け加える。

そういえば試薬って言ってたな。

「大丈夫、なのか？」

俺は心配になって聞いてみる。

不老不死とはいえ、俺の妹に変な薬投与されても困る。

「さあ。全く分かりません。通常の間でもまだ調査段階なのに、おそらく細胞の動きが通常と異なる彼女に通用するかどうか」

「大丈夫！」

結衣が断定する。

「所長、科学者が根拠のないこと言わないでください」

「大丈夫！ 私が保証する！」

真剣な表情。

いつものどこか抜けてて、どっちかというところ可愛い表情じゃなく、研究者然とした真剣な表情。

「分かりました。拓海さん、やらせてやってください」

樋田が頭を下げる。

「こんな顔の所長は研究中にしか見たことがありません……こんなことを言うのは残念でたまりませんが、私が唯一尊敬できる所長の表情です」

まあ。この樋田がこんなことを言うのなら、間違いないだろう。

「万一失敗したら、所長が代わりに妹になりますので」

「うん……ええっ!？」

「いや、それはいいけど……分かった、頼んだ」

騒がしい妹は一人いれば十分だ。

その妹を何とかしてくれるならそれでいい。

「じゃ、やるわよ、樋田！」

「はいはい、我々医者じゃないんで医療器具は持ち合わせてません。本当は点滴注入が一番だと思いますが、そんなものはありません。多少時間はかかりますが、皮膚からの浸透と、鼻や口からの服用し
かないでしょうね」

樋田は相変わらずの口調でそう言う。

その口調が今では安心感になってるから不思議だ。

「うん、じゃ、やるわよ！ 樋田、メスシンダー！」

「ホテルじゃないですか？」

「何で持ってこなかったのよ！」

「持って来いと言われませんでしたし」

「あああああ、もうっ！」

結衣は試薬品を目分量で混ぜる。

「って、目分量かよ！？」

「だ、大丈夫なのか、それ？」

さすがに不安になって聞いてみる。

「大丈夫！ 多分！」

「全然大丈夫じゃねえ！」

先ほどは全面的に信じた根拠のない大丈夫も、今度はさすがに信じられなかった。

まあ、今さらやめるとも言えないし、任せた以上見守るしかないな。

「皮膚からは怪我のひどいところだけ、後は鼻から注入するわよ」

結衣が指示すると、樋田が試薬をまずは頭部に塗る。

彼女のほうは鼻から入れようと思ったが、管がないので口を開けて流し込んだ。

機能が半停止している伏は飲み込まないが、喉の奥まで開かせて強引に流し込む。

「ちょ、ちよつと待ってくれないか？」

樋田が伏の服を脱がそうとしているので、とりあえず止める。

「何ですか？ これは緊急医療行為ですよ？」

医療行為認めちゃ駄目だろ。

「いや……そこは出来れば、結衣がやってくれないか……？」

まあ、裸を見られるのは仕方がないにしても、服を脱がされるのは出来ればやめていたきたい。

「大丈夫です。僕は熟女属性なので、彼女くらいの年齢には興味あ

りません」

「いや、そんな堂々と嘘をつかれても困るが……」

樋田が結衣をどう思ってるかなんて知ったことじゃないけど、まあ、少なくとも樋田が熟女属性でないことは分かる。

「分かりました、では同性に興味津々の所長お願いします」

「え？ え？ 何のこと？」

「いやもう、俺が脱がすからさ……」

しょうがなく俺は伏の服を脱がす事にした。

起きてたら泣いて喜んだだろうなあ、こいつ。

そうしてしばらく口から流し込んだり、皮膚から塗ったりして、薬を使った。

「これでやれる事はやったわ。後は結果を待つだけよ」

ふう、と、一息つく結衣。

「樋田、ココア！」

「ありません。人の家ですよ。何か他の事してください」

「何もすることないわよ」

結衣は疲れたように、ソファに沈む。

「とりあえず、拓海さんをお兄ちゃんと呼ぶ練習をしておけばどうですか？」

「え？ え？ ……お兄ちゃん？」

戸惑いながらも、とりあえず俺をお兄ちゃんと呼ぶ結衣。
なんだ、この殺傷能力は！

ツインテールでゴスロリの上目遣いには殺傷能力がある、と常々親父に言われてたが、本当にここまであるとはな。

一瞬本当に妹にしていまいたいと思ったくらいだ。

だが、心に決めておこう、俺の妹は伏一人だ。

「いや、もし失敗しても、俺の妹は伏だけだからいって」

すまん、伏。俺、一瞬だけど心が揺らいた。

「何を言ってるんですか、拓海さん。所長はどこに出しても恥ずかしい妹ですよ」

だろうな、こいつと一緒に歩いてたら恥ずかしくて仕方がない。

「だったら余計にいららないんだが……」

「樋田！ あんたは何でそんな事しか言えないのよ！」

結衣はいつものように怒り出す。

樋田は平然と流す。

そんな、風楼家の面々をもしても馴染みとなって来た光景。

彼らの言動に目と耳を傾けていた全員が、その光景を見逃していた。

「あれ……？　ここは、家……？」

俺にとってそれは聞きなれた声。

俺の思考が一瞬止まる。

さっきまではありえないと思っていたことが、聞けないと思っていた声が今聞こえてきた。

俺は、物凄い勢いで振り返る。

伏は、不思議そうに俺を見返した。

「痛いっ！　あれ……？　あ、私、車に引かれて……」
痛みと戸惑い。

伏は周囲の様子うかがう。

「あれ……きゃ！　どうして私、服脱いでるの？」

体を隠そうとする伏を、俺は抱きしめた。

「お兄……ちゃん……？」

どまどった表情のまま、だが、伏は慌てることもなく、俺に身をゆだねた。

「よかった……お前が無事でよかった……」

さっきまで紫色で膨れていた伏の身体は、白く細い肌に戻り、髪も、頭の形も元のままだった。

「お兄ちゃん、私は殺したって死なないよ？　大丈夫だから……」
俺を優しく慰める。

何でそんなことを言うんだよ。

ああ、俺が泣いてるからか。

抱きしめていた俺はいつの間にか伏に頭を撫でられて泣いていた。撫でられながら、俺はもう絶対こいつを苦しませる真似はしないと誓った。

幕間 研究者の退却

「所長」

二人の様子をほっとして見つめていた結衣の肩を叩く樋田。

「何よ」

「帰りましょう」

樋田が結衣に囁きの声で言う。

「? どうして？」

「全て、解決したからです。こういう時は感謝を言われる前に去るのが、一番格好いいですよ」

「うん、じゃあ、帰ろうか」

結衣と樋田は抱き合う二人と、それをほほえましく見守る父を背に、玄関に向かう。

玄関で樋田はさつさと靴を履いて、結衣が履き終わるのを待つ。

「さつさと履いてください」

樋田が急かす。

「分かってるわよ!」

彼女の靴は、服に合わせて特殊なもので、履くにも脱ぐにも時間がかかるものだった。

そうこうしているうちに、拓海が追いかけてきた。

「なあ、二人とも今日は本当に」

「見つかった! 逃げないと!」

何を思ったか、結衣は履きかけのままの靴で慌てて逃げ出した。「すみません、うちの所長馬鹿なんです。それではお騒がせしました」

残った樋田が、何の反応も出来ない拓海に一礼をして、玄関を閉めた。

それからまたいつもの生活が始まった。

朝起きると伏に会い、二人で学校に行き、伏と一緒に帰る（時々、真希も）。

夜には伏が襲撃をかけてきて、俺がそれを撃退する。

面倒だと思っていたそんな日常が、今は少しだけありがたく思える。

あの事故はそれを教えてくれたとも言える。

もちろん、あの事件があれば済んだわけじゃない。

街中の大通りで、車にはねられた被害者を、数人の者たちが連れ去ったわけで、目撃者は大勢いる。

さすがに風楼家と裏でつながっている有力者の力を借りざるを得なかった。

幸い、近場で見た者は関係者以外おらず、どここの誰とまで特定される事はなかった。

はねられた時に制服だったため、高校は特定されたのだが、翌日全員登校して来た事で、被害者がいない事が証明されてしまった。

その後もしばらく調査もあっただろうが、結局それ以上の手がかりはなく、被害者が消えてしまったため、早々に迷宮入りとなった。もちろん噂が全てなくなるわけじゃないだろうけど、これ以上新しい事実がない以上、いつしか都市伝説の類になって行くことだろう。

結衣と樋田には、あれ以降会ってない。

俺としては礼の一つも言いたかったし、怒鳴ったことももつとちやんと謝りたかったが、よく考えるとあいつらのホテルすら知らなかった。

それからしばらくして、１リットル瓶の試薬混合液が送られてきた。

住所が東京だったので、あのまま帰ったんだろう。

また同じようなことがあったら使え、ということだろう。

ありがたい、本当にありがたいが、俺はこれを二度と使うことはないだろう。

俺が伏を守る。

だからこんなものはもう必要はない。

そんな誓いを新たにしながら、俺はベッドにごろん、と寝ころんだ。

「ん？」

天井からＵＦＯキャッチャーみたいなのが下りてきた。

何だこれは？

そんなことを疑問に思っている間に、それは俺の股間をむんず、とつかんだ。

「フオオオオオッ！」

何だ、誰の仕業だ！ 分かるけどさ！

そう思っていたら、入り口のドアが開いた。

「ふふふふっ！ 引っかかったわねお兄ちゃん！ これで私は手を二本残したまま！ 後はお兄ちゃんを犯るまでよっ！」

勝ち誇った伏の表情。

くっ、これまでか……！

まあ、最近はそれも悪くないと思ってる。

あの事故が遭った時、俺は絶望したし、死ぬほど後悔した。

少なくとも、俺は伏が好きだ。

それが女としてなのか、妹としてなのかは分からない。

とにかく俺はこいつと一緒に生活したいと思ってる。

伏がそれを望むなら、それもいいと思った。

「覚悟はいい、お兄ちゃん？」

下半身裸の伏が、俺の上に跨る。

その表情は勝ち誇っていた。

…… あー、やっぱり嫌だな。

可愛いし、こいつの願いは全てかなえてやってもいいと思ってるが、なんかこいつに負けてそういう関係になるのは嫌だな。

だが、この状況はどうしようも…… あれ？

どうしようもないのは俺だけじゃないよな？

「なあ、お前、これからどうするつもりだ？」

「そんなの言うまでもないよ、お兄ちゃんと一つになるのよ」
頬を押さえ、照れた様子で言う。

あー、まだ分かってないんだこいつ。

「それってどうやるんだよ」

「そんなこと言わせるの？ 分かったよ、お兄ちゃんのおちんちんを私の…… ああああああつ！」

やっと気づいたか。

俺のマイサンはマジックハンドみたいなのが掴んでるので、それがある限り伏もどうにかすることが出来ない。

マジックハンドさえなくなれば、俺は自由になり、策略なき近接戦で、俺が伏に負けるいわれはない。

「くっ……！ 覚えてなさいよ、お兄ちゃん！」

伏は下半身裸のまま部屋を出て行った。

「おい、これ何とかしてから行ってくれ……」

俺は股間をマジックハンドに掴まれたままだった。
こういう毎日がこれからも続くんだろうなあ。

ま、それも悪くない、何度も言うがそう思えるように、最近はなってきた。

妹は不老不死。（後書き）

一応ここまでで完結です。

続きを書くかどうかはリアクション次第です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3213ba/>

妹はふろうふし

2012年1月8日20時52分発行